ISSN 0918−9904

橋垣内遺跡（A～C地区）発掘調査報告

研究紀要第18－3号

2009（平成21）年3月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、三重県教育委員会が、主要地方道津関線道路改良事業に伴い平成４年度に実施した津市大里窪田町に所在する橋垣内遺跡の埋蔵文化財発掘調査の結果を再整理したものである。

2　調査は下記の体制で行った。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター

主　事　川戸達也

研修員　紀平みどり

3　報文執筆は川戸達也、紀平みどり、穂積裕昌、河北秀実が、写真撮影は川戸達也、紀平みどりが担当し、全体の編集は河北秀実が担当した。

4　木製品の樹種同定にあたっては、天理大学附属天理参考館（当時）の金原正明氏にお世話になった。記して謝意を表する。

5　地図及び遺構実測図は、国土調査法の日本測地系による第Ⅵ系座標を基準とし、挿図の方位は座標北を示している。なお、当遺跡周辺の磁北は平成６年現在で、座標北からＮ６°40′Ｗ振れている。

6　遺構埋土及び土層の土色、土質は肉眼観察による。

7　遺構表示略記号は下記のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物、　ＳＥ：井戸、　ＳＤ：溝、　ＳＲ：流路、　ＳＫ：土坑、　Ｐit：ピット、ＳＺ：性格不明遺構、　Ｔ：トレンチ、　Ｇ：グリッド

8　遺構番号は調査区単位で１から付与している。

9　遺物番号は通し番号である。

10　本書で報告した記録図面類、写真及び出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管・管理をしている。

本文目次

例言
Ⅰ　前言……（川戸達也）…1
　1　調査に至る経過……1
　2　調査の方法と経過……1

Ⅱ　位置と環境……（紀平みどり）…3
　1　位置と地形……3
　2　歴史的環境……3

Ⅲ　県道Ｂ地区（桜垣内地区）の調査……（穂積裕昌）…7
　1　遺構……7
　2　遺物……7
　3　まとめ……12

Ⅳ　県道Ｃ地区（橋垣内地区）の調査……（川戸達也・河北秀実）…26
　1　層序……26
　2　遺構……26
　3　遺物……34
　4　まとめ……38

Ⅴ　県道Ａ地区（丸垣内地区）の調査……（川戸達也・河北秀実）…43
　1　層序……43
　2　遺構……44
　3　遺物……44

Ⅵ　拡張区の調査……（川戸達也・河北秀実）…44

Ⅶ　採集遺物……（河北秀実）…45

Ⅰ　前言

1　調査に至る経過

主要地方道津関線は、古くは、伊勢別街道として津東北部から亀山市関町鈴鹿峠付近を結ぶ重要な路線として人々の生活の中に生きてきた。近年、交通量が増加してきたため改良事業がすすめられてきたが、集落付近では用地の確保が困難であった。このような状況の中で、一般国道23号中勢バイパス（中勢道路）へのアクセス道路としての機能を兼ね備えた新路線の建設が計画されることになった。この道路は、三重県総合文化センターの落成に合わせて早期の建設が待たれている。なお、津市上津部田町他においては、都市計画道豊里久居線としてその整備事業の一部が完了している。

橋垣内遺跡は、中勢道路建設に伴う事前の分布調査によって六大Ｂ遺跡、大古曽遺跡の間を埋める形で存在が追加確認されたものである。平成元年度から同２年度にかけて約12,000㎡が中勢道路建設の事前調査として発掘調査されている。この調査の結果、東西に遺跡範囲の拡大が予想され、県道建設に際しては事前の発掘調査が必要であることが認識されていた。

当遺跡の範囲を確認するため、平成３年6月12日に試掘調査を実施したところ、遺跡は北西方面に広がりを持つことが確認され、字橋垣内ばかりでなく字丸垣内、字桜垣内、字池の下にまで及ぶことが判明した。しかし、事業予定地内では、平成2年度団体営ほ場整備事業の際に未調査のまま攪乱されている部分があり、この部分に関してはトレンチによる遺構確認調査を、それ以外の部分については本調査を行うことが必要であると判断した。

当遺跡の取扱いについては、その保存に努めるように県土木部・津土木事務所との協議を重ねてきたが、この道路が地域振興と交通緩和のため必要であり、設計変更も困難なことからやむなく事前の発掘調査を実施することになった。その結果、事業予定地約15,800㎡の内本調査必要区域は計10,600㎡、トレンチ調査必要区域は計5,200㎡となった。

今年度は、本調査計4,000㎡、トレンチ調査5,200㎡を実施し、残り6,600㎡は次年度以降改めて調査することとなった。

また、当遺跡に隣接する大古曽遺跡は南東の一身田町大字大古曽字宮縄手にもその広がりが想定されていたために、事業予定地内約2,600㎡において平成４年10月５日に大古曽遺跡の試掘調査を実施した。結果は、予想に反して遺構・遺物と共に確認されなかった。従って、中勢道路交差点以南の地区については工事に支障がないと判断し、直ちに着工されることになった。

2　調査の方法と経過

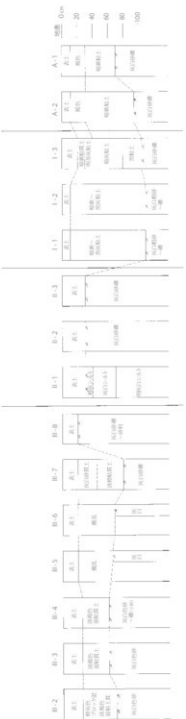
発掘調査は県土木部の執行委任を受けて、平成4年8月17日から開始し、平成5年1月29日に現地での調査を完了した。

今年度の調査区は、総延長約500mにおよび本調査とトレンチ調査区が交互に並んでいる。本調査区を北から順に丸垣内地区をA地区600㎡、桜垣内地区をB地区1,000㎡、橋垣内地区をC地区2,400㎡とし、それぞれ４ｍ×４ｍグリッドを基本単位として調査を進めた。トレンチ調査区についてはA―B間とB―C間に別れているが、ここに２ｍ×10～15mのトレンチを20m間隔で道路中心線に直交するように設定し、必要に応じて拡張した。

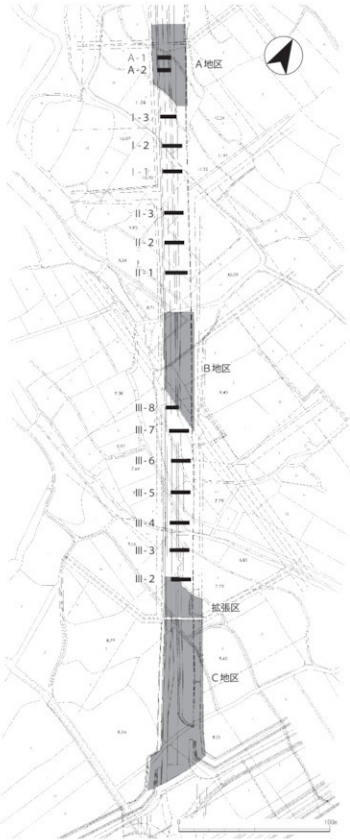
発掘作業は、表土をバックホーで除去することから始めたが、既に表土が無くなっている所や、逆にほ場整備の際の排土が堆積している所があったりして、遺構面に影響を与えないように表土を除去することの難しさを改めて感じさせられた。

また、排土はトレンチ調査が終了した地区へ捨てることを原則としたが、C地区では隣接したほ場へダンプカーによって搬出した。その後、人力によって遺物包含層掘削及び遺構検出を行った。

遺構検出及び遺構掘削の終了した調査区においては必要に応じて遺構別実測を行った後、地区毎に測量を実施した。A・B地区では平板測量を行い、各地区の基準点に中勢道路センター杭から放射トラバースによって座標を移動した。C地区では、航空写真測量を行った。また、測量時に絶対高の基準となるベンチマークは一身田大古曽の路肩にある№19の２級基準点を採用した。



第１図　トレンチ調査区土層柱状図



第２図　調査区位置図 (1：2,500)

調査日誌（抄）

8月17日	現地にて調査開始
	トレンチ調査区掘削
8月18日	トレンチ調査続行
	台風のため午後中止
8月19日	台風のため中止
8月20日	B地区表土除去
	遺構検出開始
8月25日	レベル移動
9月7日	B地区旧河道ＳＲ2検出
9月16日	B地区旧河道ＳＲ2掘削開始
9月21	A地区表土除去
9月29日	降雨のためB地区水没
10月5日	大古曽遺跡試掘調査
10月8日	トレンチ調査拡張区掘削
	C地区表土除去
10月20日	A地区遺構検出開始
	B地区旧河道ＳＲ2遺物出土状況実測
10月26日	A地区掘削終了
10月30日	C地区表土除去再開
11月12日	B地区掘削完了
11月16日	C地区遺構検出開始
11月17日	B地区写真撮影・遺構実測
11月18日	A地区写真撮影・遺構実測
12月7日	降雨のため東端から1/3冠水
12月8日	やむなく西端から検出再開開始
12月10日	井戸ＳＥ9検出
12月16日	井戸ＳＥ8検出
12月27日	C地区土層断面図実測
1月6日	作業再開
1月7日	井戸ＳＥ8半截実測
1月11日	A・B地区座標振り込み
1月12日	航空測量のための現地説明会
1月18日	航空測量業者入札
1月26日	C地区写真撮影・遺構実測
1月27日	航空測量
1月29日	現地での調査終了
1月30日	現地説明会

（川戸　達也）

II　位置と環境

1　位置と地形

三重県の北中部に広がる伊勢平野、そのほぼ中央部に位置する津市は、東に伊勢湾を望み、半田丘陵・長谷山・長岡丘陵に三方を囲まれ、安濃川・志登茂川・岩田川によってできた沖積平野上にある。

橋垣内遺跡（1）の所在する津市大里窪田町は、津市の北西部にある丘陵地の裾野に位置し、現在町の中央を東西に伊勢別街道が縦走し、集落は街道に沿って連なっている。町の北側を流れる志登茂川は、その源を芸濃町の丘陵地に発し、蛇行を繰り返しながら高尾野・大里地区の洪積台地を開析し、大里窪田町を境に川幅を徐々に広げ、一身田・上浜町を抜け津市の北西から南東方向に流れ沖積平野を形成している。河口は津市の中央部を流れる安濃川に接して伊勢湾に開口する。志登茂川の北には標高30～90m前後の河芸丘陵が南東方向に連なり、南には標高30m前後の比較的低い丘陵が伸びている。両丘陵とも第三紀奄芸層群からなり、その間には洪積台地が舌状に伸びて大里窪田町の東端付近で約10mの段差を成して沖積平野へ移行する。

橋垣内遺跡は、志登茂川の支流である毛無川の中流域標高8～15mの下位段丘から低地の間に広がる小扇状地に位置する。毛無川は、津市大里窪田町西部の丘陵を源とし、大里窪田町の水田地帯を潤しながら北東に下り、一身田の集落を通り上浜町にかかる手前で志登茂川に合流している。しかし、その一方で下流の沖積平野は標高1～2mの低湿地となっており、近年まで海岸から2km内外までは、所々に湿地が残る状況が見られていた。そのため、沖積低地部の中央にある一身田の集落は、志登茂川や毛無川の氾濫による影響を強く受けている。

2　歴史的環境

志登茂川流域を中心に周辺の調査された遺跡を主として時代順に述べてみたい[11]。

現在のところ旧石器時代の明確な遺跡は津市及びその周辺では確認されていないが、平成4年度の調査で津市大里窪田町東浦遺跡[12]（2）から旧石器時代から縄文時代草創期と見られる木葉形尖頭器が発見さ

れた。遺構については不明であるがこの時代の遺物としては、津市内では初めての出土となる。その他に安濃町平田古墳群（3）でも旧石器時代に遡る可能性が考えられる石器が3点報告されている。

縄文時代になると遺物の散布はあるが明確な遺構の検出されている例は少ない。橋垣内遺跡からは早期の押型文土器が、また旧河道の河底近くからは晩期の土器が出土している。東浦遺跡では少量だが早期から中期頃の土器片が土坑から出土している。大里西沖遺跡（4）からは、縄文時代中期末とみられる竪穴住居1棟、土坑4基が検出された。その他縄文後期の土器片が遺構を伴わず峰合遺跡（5）、川北遺跡（6）から出土している。安濃川中流域では、中期末葉の土器が土坑や集石遺構を伴って出土した宮ノ前遺跡（7）や晩期の竪穴住居が検出された松ノ木遺跡（8）等がある。その他、納所遺跡（9）、辻の内遺跡（10）、多倉田遺跡（11）で晩期の土器が出土している。

弥生時代になると、安濃川流域に伊勢平野で最大の弥生時代集落遺跡である納所遺跡が現れる。納所遺跡は弥生時代前期・中期と古墳時代以降の複合遺跡でこの地域の拠点的集落であろうと考えられている。志登茂川流域では、弥生時代中期のものとして、川北遺跡で土器片が見つかっている。また、橋垣内遺跡では、方形周溝墓と土坑墓が検出されている。住居としては、見当山丘陵部の長遺跡（12）で200棟近い竪穴住居が、山籠遺跡（13）では10棟の中期後葉の竪穴住居が検出されている。後期については、水田跡が検出された森山東遺跡（14）が挙げられる。また、多量の土器がV字溝や竪穴住居から出土した東豊野遺跡（15）、隅丸方形プランの竪穴住居が1棟確認されている中喜遺跡（16）などがあり、この時期は遺跡数が一段と増加している。

古墳時代の遺跡は、古式土師器を伴う竪穴住居3

第3図　遺跡位置図 (1：50,000)

棟が検出された中鳶遺跡、前期の大集落として竪穴住居70棟以上と方形周溝墓７基が検出された川北遺跡がある。橋垣内遺跡では、竪穴住居７棟が、東浦遺跡で前期の竪穴住居数棟が確認されている。また六大A遺跡[22]（17）では古墳時代の大溝から多量の木製品と祭祀遺物が出土している。志登茂川流域に現在約100基以上の古墳が報告され、大多数は径10m程の円墳で後期の築造と考えられている。登茂川左岸の丘陵部や段丘上に数基単位の古墳群が比較的多く分布するのに対し右岸の丘陵部は数少なく点々と分布する傾向が認められる。そのうち発掘調査されたものは、木棺直葬の主体部に鉄鏃１本のみが出土した墓の谷１号墳[16]（18）がある。その南に２号墳（19）、東に3号墳（20）があり、いずれも径10m前後の小型の円墳で、２号墳からは円筒埴輪片が出土している。また、３号墳の東南に菅ヶ谷２号墳（21）、東に１号墳（22）がある。２号墳は、すでに破壊されているが大きな石があり横穴式石室が破壊されたものらしい。西岡古墳[17]（23）では、墳丘北東側の溝から鉄製農工（耕）具と墳頂部から鉄剣が出土した。一方、安濃川流域では、志登茂川流域に比べ、明合古墳（24）や長谷山古墳群のような大規模古墳や大群集墳が見られる。

律令時代に入ると窪田の地名は、平城宮出土の木簡[18]に『伊世国庵伎郡　久営多里私部小□□』と書かれており８世紀の初め頃には律令政府の国家体制の中で一つの行政単位として確立されていたことがうかがえる。平安時代の「和名抄」[19]に記される窪田郷は当地域を中心とした郷と推定される。このころの遺跡としては、緑釉陶器や円面硯、多数の掘立柱建物が見つかった安養院跡[20]（25）、飛鳥・奈良から平安時代の掘立柱建物が中心で緑釉陶器や石帯が出土した六大B遺跡[21]（26）がある。この辺りは、古代庵伎郡の官衙、具体的には庵伎郡の郡衙であった可能性が高いとされる。また、安養院跡、六大B遺跡共に軒丸・軒平瓦が出土している点も興味深い。他には飛鳥から奈良時代にかけての掘立柱建物が検出された大古曽遺跡[23]（27）、橋垣内遺跡[25]、奈良時代の掘立柱建物が検出された大垣内遺跡[24]（28）がある。

中世になると窪田郷に、窪田荘が成立し、「神鳳鈔」[23]に見られるように、永久年間に伊勢神宮に寄進され「窪田御厨」となったものとみられるが、14世紀になると、再び摂関家領窪田荘の名が現れることから、その支配権は転々としたものと考えられる。建武元年伊勢国守護北条氏の没落により窪田荘は再び伊勢神宮に寄進されたがそれ以降地頭職の史料は見えなくなり、在地の武士によって押領されたものと推定される。一方領家職は幕府より京都熊野若王子神社に寄進され、室町時代を通じて若王子神社の知行が安堵されていたが、太閤検地によって否定され、近世には津藩領となる。大古曽遺跡、六大A遺跡、六大B遺跡では、中世の遺構・遺物も見つかっている。付近の主な中世城館としては、鎌倉時代から室町時代にかけての城館である川北城[26]、大規模な空堀を持つ峯治城[27]、掘立柱建物や柵列の見つかった上津部田城[28]等がある。

そして、所謂参宮道が室町時代以降に安濃川ルートから志登茂川ルートに変わっていく中で窪田は、近世に入り伊勢参宮の流行につれて宿場町として新たな繁栄を迎える。宿の東端には近江商人が奉献した常夜灯があり江戸時代半ばには庄屋である国府家を本陣とし、他に本陣代を務めた花屋等、屋号を持つ家が多数並んでいた。また、六大B遺跡A地区[30]では発掘調査により近世の遺構・遺物が確認されている。

（紀平みどり）

第4図　遺跡地形図 (1：5,000)

Ⅲ　県道Ｂ地区(桜垣内地区)の調査

Ｂ地区は、橋垣内遺跡県道調査区の中央部、現在の毛無川河道のすぐ東側に位置する。縄文時代と古墳時代に属する河道が確認され、特に古墳時代の河道からは大量の土器・木製品が出土した。

1　遺構

旧河道ＳＲ１　幅 5.8 ～ 8.2 m、深さ約 1.2 mの南北河道である。南側は河道肩部から緩やかに落ち込むが、北側は幅狭で落ち込みが急である。地形から南流していたとみられるが、底面高は北端・南端とも標高 8.2 mとほぼ等しい。埋土上層から僅かながら縄文中期後葉の土器片が出土した。

旧河道ＳＲ２　調査区の中央を横断する幅 5.5 m～ 6 m、深さ 1.2 mの東西河道である。地形から東流していたとみられる。弥生時代後期から古墳時代後期までの土器（主体は古墳時代中期～後期初頭）と大量の木器・自然木が出土した。上層をみると、当初、自然の流路があったが（Ⅵ層）、その流路がある程度埋没した後に大きく２回の掘削が加えられた。最初の掘削が弥生後期～古墳初頭で、その後、遺物取り上げの「Ⅴ層」・「最下層」が堆積し、さらに古墳中期に再掘削（その後の堆積が遺物「Ⅳ層」）された。Ⅳ層（この場合、Ⅳ１層）とⅤ層の間には北岸側にラミナ状の堆積層（Ⅳ２～Ⅳ６層）がみられる。ただし、Ⅳ１層にも古墳前期の土器が大量に混じっており、上位層の下位層への侵食等によって層の安定性は低かったと判断される。

遺物のほとんどはⅣ層からの出土で、Ⅳ層中で３面の出土状況図が作成されている。遺物の出土状況は雑然とし、何らかの意味を見出しづらい部分が多い。しかし、Ⅳ層第１面（上部）で、内部にモモ核の入った須恵器甕（133）と特殊な甕（75）・土師器高杯（38）・鏡とみられる木製形代（211・212）が集中して出土た部分がある。いずれも、祭祀に供されることのある遺物群であり、何らかの祭祀行為に用いたものを一括して投棄した可能性があろう。

なお、このⅣ層の時期に、流路脇に付設施設であるＳＺ３が造られているが、性格等は不明である。

2　遺物

橋垣内遺跡県道Ｂ地区出土の遺物は、古墳時代中期を中心とした旧河道ＳＲ２出土遺物が大半を占め、そこに縄文時代の河道である旧河道ＳＲ１出土の縄文土器がごく微量伴う。旧河道ＳＲ２には、土器だけでなく大量の木製品も伴っている。以下、特徴的なものを中心に簡単に解説しておく。

a　旧河道ＳＲ１出土遺物（１～２）

いずれも縄文晩期の突帯文土器で、口縁部の残る１の突帯は素文である。

b　旧河道ＳＲ２出土遺物

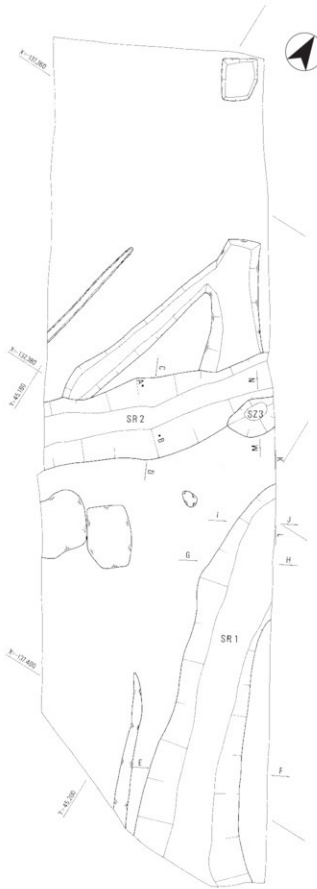
土器は現場で把握された層序別の取り上げに従って配列したが、結果として必ずしもそれが正確に時期差を反映しているとは言いがたく、新古の土器が同一層で混在するなどかなり混乱した状況が見受けられる。なお、木製品は、後述する。

最下層（Ⅴ層）出土土器（３～７）　壺（３～５）・受口鉢（６）・小型器台（７）がある。３～６は弥生後期、７は古墳時代前期に属する土師器である。

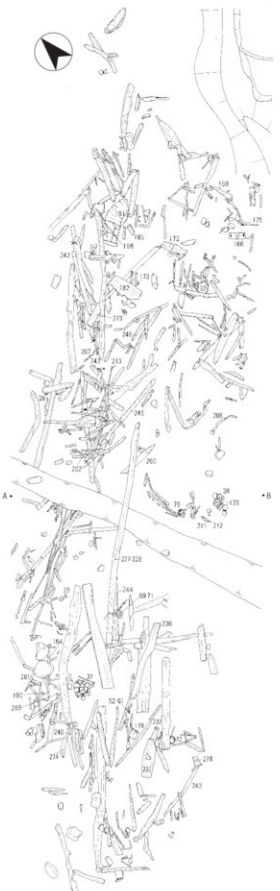
Ⅳ層内ＳＺ３出土遺物（８・138）　ガラス玉（８）と土師器高杯（138）がある。ガラス玉は縦長で、胴部が膨らむ形状を呈する。色調は黄色である。

Ⅳ層出土土器・土製品（９～ 76・133）　弥生後期土器では広口壺（９～ 16）・長頸壺（17）・二重口縁壺（19）・形式不明壺（18・20）・直口壺（47）、器台（21 ～ 22）、高杯（23 ～ 26）、受口甕（27）・口縁形式不明台付甕（28）、土師器ではく字形甕（29 ～ 33）・Ｓ字甕（34 ～ 37）、高杯（38 ～ 42）・小型丸底壺・鉢（43 ～ 45）、小形壺（46）、ミニチュア壺（48）、手捏ね土器（49 ～ 63）、杯（64 ～ 67）、甑（68）、須恵器の杯蓋（69）・杯身（70 ～ 73）・鼈（74・133）・小形甕（75）・土師質の土玉（76）を図示した。弥生時代後期に属するものから、古墳時代後期初頭に属するものまでを含む。このうち、須恵器小形甕（75）は、全体をタタキ成形した丸底の甕で、口縁部に外斜面をもつ。形態的に珍しい。

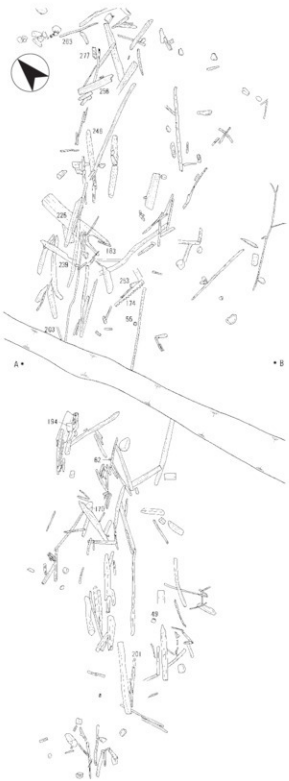
Ⅲ層出土土器・石製品（77 ～ 97）　土師器高杯（77 ～ 78）、受口甕（79）・く字形甕（古墳前期：81・後期：92・古代：94 ～ 95）・Ｓ字甕脚台部（82 ～ 86）・口縁形式不明台付甕（80）、須恵器の杯蓋（87）・杯身（88 ～ 91）・壺（93）、それに軽石（96 ～ 97）



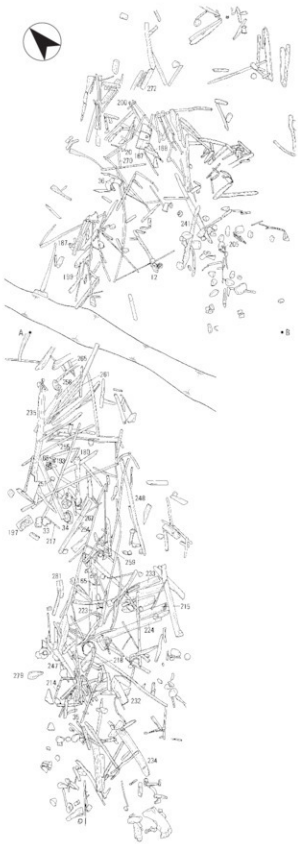
第5図　B地区遺構平面図(1：300)



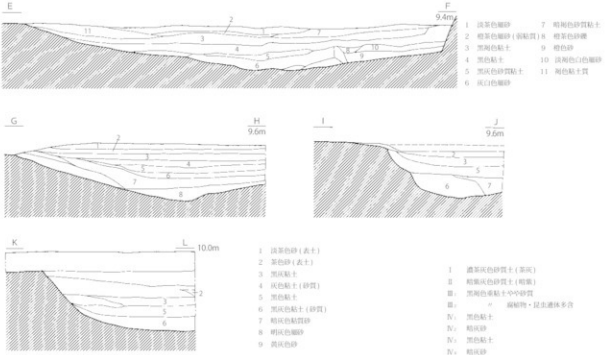
第6図　SR2 IV層第1面出土状況(1：60)



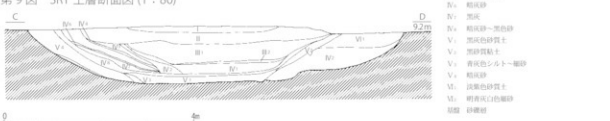
第 7 図　SR2 Ⅳ層第 2 面出土状況図 (1：60)



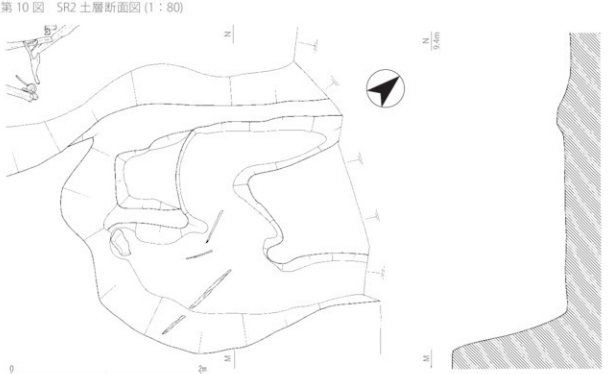
第 8 図　SR2 Ⅳ層第 3 面出土状況図 (1：60)



第 9 図　SR1 土層断面図 (1：80)



第 10 図　SR2 土層断面図 (1：80)



第 11 図　SZ3 実測図 (1：40)

がある。遺物の時期幅が広く、層として一括性の安定性は低い。

Ⅱ層出土土器（98～121） 弥生土器の甕（98）と高杯（99）、土師器の高杯（100・103～104）・有頸鉢（101）・S字甕（102）・粗製小形丸底壺（105）、須恵器の高杯蓋（106）・高杯（107）・杯蓋（108～110）・杯身（111～115）・壺（116～117）・甕（118～120）・俵瓶（121）がある。

Ⅰ層出土遺物（122～125） 須恵器短頸壺（122）・杯身（123）・大甕（124）・有頸鉢（125）を図示した。いずれも古墳後期以降に属しよう。

層不明遺物（126～132・134～137） 弥生土器～土師器の壺（126～128）、土師器のヒサゴ壺（129）・高杯（130～131）・丸底壺（132）、須恵器の有蓋高杯蓋（134）・杯身（135～136）、土錘（土師質、137）を図示した。128の胴上部には、鋸歯状の記号文がみられる。

石鏃・石製品（138～146） 出土層序に関係なく、石鏃と石製品を一括した。138はサヌカイト製の石鏃である。側縁が鋸歯状に調整されており、弥生時代の所産であろう。139は管玉、140は滑石製勾玉、141～146は滑石製臼玉である。滑石製臼玉のうち、141は中央部が菱形に膨らんで稜線をもつ。

包含層出土遺物（147～163） 縄文土器（147～148）、弥生土器壺（149）、土師器高杯（150～151）・S字甕（152）、甕（160）・須恵器杯蓋（153～154・156～157）・杯身（155・158～159）・砥石（161）・軒平瓦（162～163）を図示した。縄文土器は、隆帯による口縁部窓枠区画をもち、中期に属する。軒平瓦は、いずれも二重の弧文をもち、剥落痕・接合痕から板状にした2枚の粘土を貼り合わせて1枚の瓦としていることが観察される。

c　旧河道ＳＲ２出土木製品

レイアウトの都合上、器種毎に配列した。171・177・188・189・198・222がⅢ層、238が所属層序不明である以外、残りはすべてⅣ層からの出土である。

工具柄（164～165） 164は板状鉄斧柄、165は袋状鉄斧柄である。

鍬身（166～171） 166～167は直柄広鍬、168～169・171はナスビ形曲柄又鍬、170はナスビ形曲柄平鍬である。

組み合わせ鋤身（172～173） 172は、鉄刃を装着するため、先端がU字形に加工されている。

エブリ（174） 柄孔の部分は欠損するが、鋸歯状の歯を作出しており、エブリであろう。

方形枠付田下駄（175～176） 欠損部も大きいが、いわゆる大足の破片と思われる。ただし、176はたんに有頭材とすべきかもしれない。

鎌柄（177） 端部に刃を挿入するためのスリットと釘孔があり、鎌柄と考えた。

打ち鍬（178） 両側縁が括れた扁平な身に柄が作り出されたものである。これまで鋤未製品などとされることが多かったが、豆打ちなどの打ち鍬とされることが多い。

横槌（179） 柄の先端をグリップ状に削り出したもので、六大A遺跡の横槌分類のC類にあたる。

竪杵（180） 搗部と握部の境界がいまひとつ明瞭でないが、搗部自体は円柱状の断面をもつ。

臼（181） 非常に残りは悪いが、臼が半壊したものであろう。

案（182～185） 182と183は天台、184と185は脚である。182は下面に手斧痕を残し、脚との接合仕口もないことから未製品であろう。

把手付刳物容器（186～187） いわゆるアカ取りとされる容器に似るが側縁等は欠損する。

曲物（188～189） 楕円形曲物の底板である。底板周縁をL字状に切り落とし、皮紐綴じ用の円孔を穿ったもの。側板内側に1孔を開ける188（六大A遺跡曲物底板分類のE類）と、側板の両側に開ける189（六大A遺跡曲物底板分類のD類）がある。

紡織具（190～198） 紡錘車（190～191）、木錘（192～194）、編台目盛り板（195）、桛（196）、タタリ（197～198）がある。紡錘車のうち、192は未穿孔で、未製品と思われる。タタリはいずれも台部で方形と円形がある。

機織具（199～201） 必ずしも部位は明らかでないが、一応その可能性のあるものとして掲げた。あえて部位を考えてみれば、199は経送り具、200は緯打ち具、201は糸巻具の可能性がある。

刀鞘（202） 鶏卵形の断面形状を有することから刀の鞘とみられる。

武器形（203～213） 203～207は刀形、208～213は鏃形とみられる。ともに六大A遺跡に同形状の類例がある。

儀杖（214） 壷形部から鰭飾り状の二股を作り出したものだが、二股先端は欠損している。全体に黒漆が塗られている。樋上昇氏の儀杖分類[211]のX類に相当し、5世紀後半のものと思われる。

男茎形（215） 男茎状に端部を切り落として溝を彫ったものである。

儀具？（216～222） 丁寧な調整を加えることや、刀剣類などとの形態的類似性などから、形代など儀具の可能性を考えたが、別のものかもしれない。このうち221と222は板材系で、222には線刻がある。

建築部材（223～248） 壁等の板材（223～226）、横架材（227～230）、蔵放し（231）、柱材（232～238）、垂木・下地材等（239～248）を図示した。このうち229は方形孔が斜めに穿たれており、屋根関係部材の可能性があろう。

その他（249～283） 有頭棒（249）も含め、用途がいまひとつ特定できないものを一括したが、257～259は柄、260～265などは杭であろう。

d 植物遺体

図示しなかったがSR2からはヒョウタンが出土しており、少なくとも3個体分のまとまりが見られた。また、SR2とSZ3からは200個のモモの核が出土した。すべてダビデアナ種である。いずれも、祭祀に用いられると考えられる植物であり、祭祀具の出土と合わせて注目したい。

3 まとめ

県道B地区は、調査区内で縄文時代の旧河道SR1と弥生後期～古墳時代の旧河道SR2という河道が確認されたにとどまるが、SR2はで木製品を含む豊富な遺物が出土した。ここでは、中勢道路調査で確認された河道との関連と、出土遺物について簡単に触れて、まとめとしたい。

a 旧河道の性格

県道B地区で確認された2本の河道は、基本的に西側の丘陵から流れ出た水を下流部へ排出する役割を担った河道と思われ、現在は毛無川として1本の流路に集約された状況にある。そういう意味では、旧河道SR1と旧河道SR2は、ともに毛無川の旧流路の一部であったと思われる。

その場合、県道B地区の300mほど南東側に位置する中勢道路調査区でも縄文時代の旧河道（中勢道路調査区SR1）と弥生時代後期～古墳時代後期の旧河道（SR3）がある。このうち、中勢道路SR1は縄文時代晩期の突帯文土器が出土していて、県道SR1（本調査区の旧河道SR1）の出土遺物とは時期が異なるが、浅くて幅広い流路形状は共通しており、遺構の特徴は共通性がある。同様に、県道SR2と中勢道路SR3は出土遺物の時期幅や埋土の状況に共通性が大きく、両者は同一溝の上流（県道）と下流（中勢道路）に相当する可能性が高い。

SR2は、出土遺物も豊富であったが、より上位の層序から本来下層に存在していたであろう遺物も出土するなど層としての安定性に欠けるが、Ⅳ層では祭祀に供されたと推定される土器・木製形代群が狭い範囲から集中して出土するなど旧河道ないしはその周辺部で何らかの祭祀行為が行われたことを示唆している。

b SR2出土木製品について

出土木製品は、曲物底板（188～189）などごく一部が皿層に属する以外、ほぼ全てがⅣ層からの出土である。Ⅳ層は、前後の時期の混入もあるものの、多くの土器が5世紀から6世紀初頭に収まり、ナスビ形曲柄鍬（168～170）の型式学的特徴もこれと矛盾しない。従って、Ⅳ層（Ⅳ1層）の所属時期は概ね古墳時代中期から後期初頭に相当しよう。

器種組成は、農具（耕起具・収穫具）、容器・紡績紡織具、案・祭祀具・建築部材など一通り揃っているが、器種判明木器の中で祭祀具の占める比率が相対的に高い。また、案（182）と木製紡錘車（191）の未製品がみられる以外、鍬鋤類も含めて製品のみで構成されることも特徴としてあげられよう。

特殊な遺物としては、いわゆる儀杖形木製品がある。これらが出土する遺構は、首長関連の遺跡が多いとの指摘があるが[212]、橋垣内遺跡をみる限り農具や祭祀など一般層との関わりが想定できるものが多い。ただし、武器形は、刀形や鏃形など六大A遺跡[213]のものと共通する部分が大きい。総じて橋垣内遺跡の木製品は、古墳時代中期における当地域における基本的な木器組成を示す遺跡として、今後の基準となる遺跡のひとつであろう。 （穂積裕昌）

遺物番号	実測番号	出土遺構層序	器種	残存度	備考
1	074-05	SR1	縄文土器	小片	突帯文
2	074-03	SR1	縄文土器	小片	突帯文
3	053-02	SR2・礎下層（V層）	弥生土器 壺	□縁1/2	
4	052-05	SR2・礎下層（V層）	弥生土器 壺	□縁1/4	
5	067-01	SR2・礎下層（V層）	弥生土器 壺	胴上部片	
6	053-04	SR2・礎下層（V層）	弥生土器 受口鉢	体部1/6 □縁小片	
7	010-05	SR2・礎下層（V層）	弥生土器 小型器台	□縁完存	
8	059-02	SR2・IV層内SZ	ガラス玉	完存	
9	038-01	SR2・IV層	弥生土器 広口壺	□縁完存	
10	041-02	SR2・IV層	弥生土器 広口壺	□縁3/8	
11	039-01	SR2・IV層	弥生土器 広口壺	体部3/4 □縁ほぼ完存	
12	035-02	SR2・IV層	弥生土器 広口壺	□縁2/3	
13	038-03	SR2・IV層	弥生土器 広口壺	頸部	
14	054-02	SR2・IV層	弥生土器 広口壺	胴上部片	
15	051-03	SR2・IV層	弥生土器 広口壺	胴上部片	
16	051-02	SR2・IV層	弥生土器 広口壺	胴上部片	
17	066-03	SR2・IV層	弥生土器 長頸壺	□縁1/3 体上部	
18	060-03	SR2・IV層	弥生土器 形式不明壺	体部完存	
19	046-03	SR2・IV層	弥生土器 二重口縁壺	□縁1/4	
20	054-01	SR2・IV層	弥生土器 形式不明壺	□縁1/8 体部	
21	046-01	SR2・IV層	弥生土器 器台	□縁1/6	
22	053-03	SR2・IV層	弥生土器 器台	□縁1/6	
23	055-03	SR2・IV層	弥生土器 高杯	脚上部	
24	055-02	SR2・IV層	弥生土器 高杯	杯部片	
25	066-01	SR2・IV層	弥生土器 高杯	□縁1/8	
26	055-01	SR2・IV層	弥生土器 高杯	□縁片	
27	046-02	SR2・IV層	弥生土器 受口壺	□縁1/8	
28	034-01	SR2・IV層	弥生土器 台付壺	台完存	
29	040-01	SR2・IV層	土師器 くの字形甕	□縁3/4 体部3/4	
30	042-01	SR2・IV層	土師器 くの字形甕	□縁1/4	
31	037-01	SR2・IV層	土師器 くの字形甕	□縁2/3	
32	050-01	SR2・IV層	土師器 くの字形甕	□縁3/4 体部1/4	
33	075-01	SR2・IV層	土師器 くの字形甕	□縁ほぼ完存 体部	
34	036-01	SR2・IV層	土師器 S字甕	□縁完存体部	
35	034-02	SR2・IV層	土師器 S字甕	□縁1/2	
36	035-01	SR2・IV層	土師器 S字甕	□縁3/5	
37	047-01	SR2・IV層	土師器 S字甕	□縁2/3 体部9/10	
38	066-04	SR2・IV層	土師器 高杯	脚2/3	
39	043-05	SR2・IV層	土師器 高杯	脚完存	
40	044-03	SR2・IV層	土師器 高杯	脚1/10	
41	046-04	SR2・IV層	土師器 高杯	脚1/2	

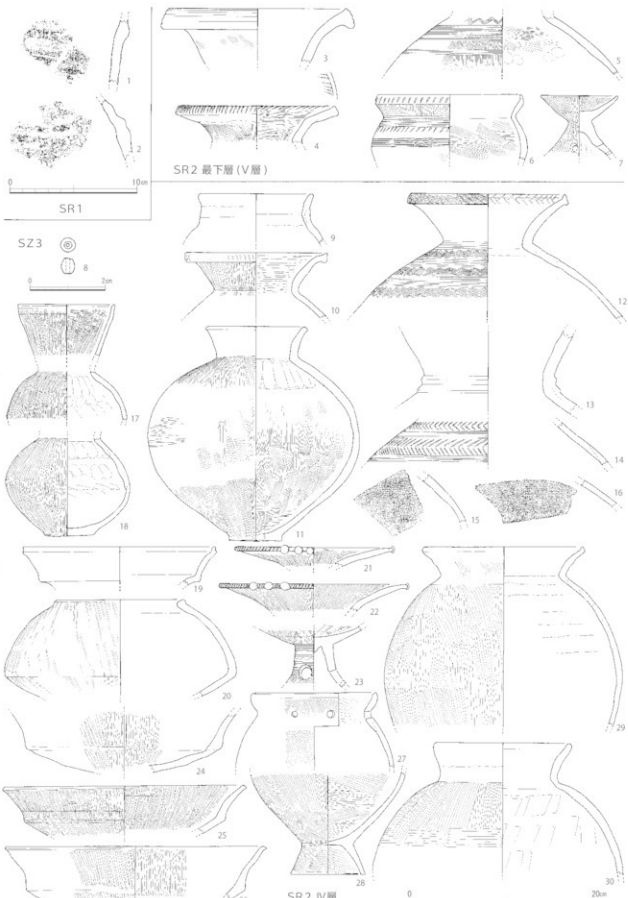
遺物番号	実測番号	出土遺構層序	器種	残存度	備考
42	048-03	SR2・IV層	土師器 高杯	脚1/4	
43	038-02	SR2・IV層	土師器 小型丸底壺鉢	□縁2/3 体部4/5	
44	048-01	SR2・IV層	土師器 小型丸底壺鉢	□縁片体部	
45	044-01	SR2・IV層	土師器 小型丸底壺鉢	完存	
46	045-02	SR2・IV層	土師器 小形壺	ほぼ完存	
47	041-03	SR2・IV層	土師器 直口壺	□縁ほぼ完存	
48	044-02	SR2・IV層	土師器 ミニチュア壺	□縁小片 体部完存	
49	048-02	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	完存	
50	057-04	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	完存	
51	049-01	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	完存	
52	067-06	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	体部完存	
53	049-02	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	完存	
54	052-04	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	□縁1/6 体部1/5	
55	041-01	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	ほぼ完存	
56	067-03	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	□縁2/3 体部	
57	067-04	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	□縁1/2 体部完存	
58	052-03	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	□縁1/6 体部1/3	
59	052-02	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	体部片	
60	035-03	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	体部下完存	
61	067-05	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	完存	
62	049-03	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	完存	
63	057-05	SR2・IV層	土師器 手捏ね土器	完存	
64	052-01	SR2・IV層	土師器 杯	□縁1/3	
65	043-04	SR2・IV層	土師器 杯	□縁2/3 体部	
66	028-05	SR2・IV層	土師器 杯	完存	
67	034-03	SR2・IV層	土師器 杯	□縁1/3	
68	061-01	SR2・IV層	土師器 甑	□縁1/5 底部2/3	
69	043-03	SR2・IV層	須恵器 杯蓋	小片	
70	049-04	SR2・IV層	須恵器 杯身	□縁わずか 体部1/4	
71	043-02	SR2・IV層	須恵器 杯身	□縁3/4 体部ほぼ完存	
72	043-01	SR2・IV層	須恵器 杯身	□縁1/2 体部1/2	
73	033-03	SR2・IV層	須恵器 杯身	□縁1/8 体部1/3	
74	045-01	SR2・IV層	須恵器 鉢	□縁1/7	
75	057-01	SR2・IV層	須恵器 小形壺	完存	
76	059-04	SR2・IV層	土師質 土玉	完存	
77	030-04	SR2・III層	土師器 高杯	脚1/5	
78	033-02	SR2・III層	土師器 高杯	□縁5/6 脚1/12	
79	060-01	SR2・III層	土師器 受口壺	□縁2/3 体部完存 台2/3	
80	067-02	SR2・III層	土師器 台付壺	台3/4	

表1－(1) 遺物一覧表

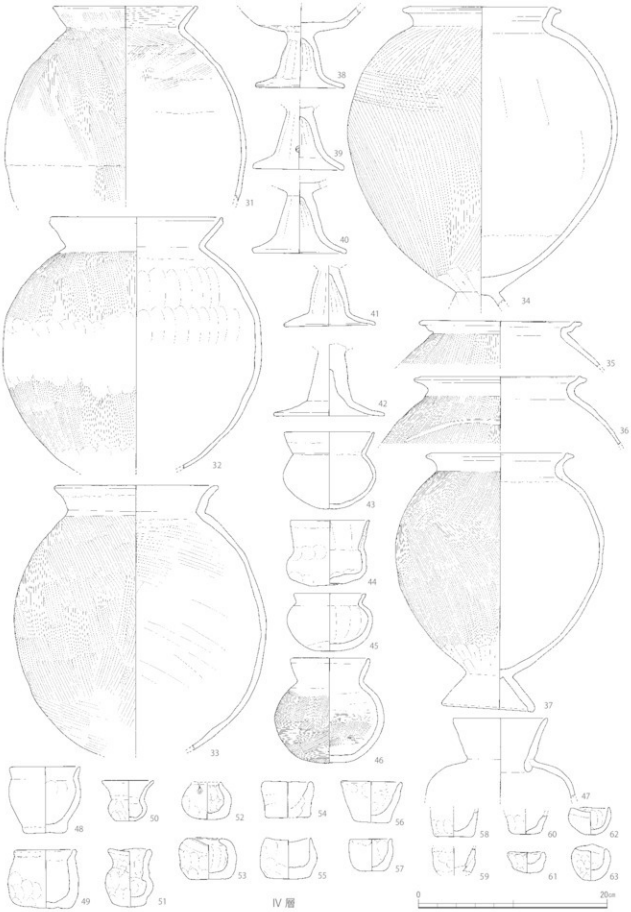
遺物番号	実測番号	出土遺構層序	器種	残存度	備考
81	032-05	SR2・Ⅲ層	土師器<く字形甕	□縁1/4	
82	032-04	SR2・Ⅲ層	土師器S字甕	□縁1/9	
83	031-01	SR2・Ⅲ層	土師器S字甕	□縁3/8	
84	030-03	SR2・Ⅲ層	土師器S字甕	□縁1/3	
85	030-01	SR2・Ⅲ層	土師器S字甕	台完存	
86	030-02	SR2・Ⅲ層	土師器S字甕	台片	
87	032-01	SR2・Ⅲ層	須恵杯蓋	7/10	
88	028-04	SR2・Ⅲ層	須恵器杯身	□縁1/5	
89	028-01	SR2・Ⅲ層	須恵器杯身	□縁3/4	
90	028-02	SR2・Ⅲ層	須恵器杯身	□縁1/2	
91	028-03	SR2・Ⅲ層	須恵器杯身	□縁小片体部	
92	032-02	SR2・Ⅲ層	土師器<く字形甕	□縁1/8	
93	029-02	SR2・Ⅲ層	須恵器壺	□縁ほぼ完存	
94	029-01	SR2・Ⅲ層	土師器<く字形甕	□縁1/2	
95	032-03	SR2・Ⅲ層	土師器<く字形甕	□縁1/5	
96	067-08	SR2・Ⅲ層	軽石		
97	067-07	SR2・Ⅲ層	軽石		
98	024-01	SR2・Ⅱ層	弥生土器甕	体部1/4	
99	022-05	SR2・Ⅱ層	弥生土器高杯	脚上部	
100	020-03	SR2・Ⅱ層	土師器高杯	脚下部5/8	
101	025-05	SR2・Ⅱ層	土師器有脚鉢	□縁1/2体部1/3	
102	027-01	SR2・Ⅱ層	土師器S字甕	3/4	
103	021-01	SR2・Ⅱ層	土師器高杯	□縁7/8	
104	021-02	SR2・Ⅱ層	土師器高杯	□縁1/2脚ほぼ完存	
105	025-02	SR2・Ⅱ層	土師器粗製小形丸底壺	完存	
106	020-01	SR2・Ⅱ層	須恵器高杯蓋	3/16	
107	017-01	SR2・Ⅱ層	須恵器高杯	□縁1/3杯3/5脚1/3	
108	021-03	SR2・Ⅱ層	須恵器杯蓋	□縁1/30	
109	022-01	SR2・Ⅱ層	須恵器杯蓋	□縁3/4	
110	025-04	SR2・Ⅱ層	須恵器杯蓋	□縁1/8	
111	022-03	SR2・Ⅱ層	須恵器杯身	□縁1/13	
112	025-03	SR2・Ⅱ層	須恵器杯身	□縁3/8	
113	022-04	SR2・Ⅱ層	須恵器杯身	□縁1/4	
114	022-02	SR2・Ⅱ層	須恵器杯身	□縁1/4	
115	020-02	SR2・Ⅱ層	須恵器杯身	□縁2/3	
116	023-01	SR2・Ⅱ層	須恵器壺	□縁1/2	
117	025-01	SR2・Ⅱ層	須恵器壺	□縁1/3	
118	018-01	SR2・Ⅱ層	須恵器壺	□縁小片体部ほぼ完存	
119	026-02	SR2・Ⅱ層	須恵器壺	□縁1/4	
120	026-01	SR2・Ⅱ層	須恵器壺	□縁1/6	

遺物番号	実測番号	出土遺構層序	器種	残存度	備考
121	019-01	SR2・Ⅱ層	須恵器体部	□縁2/3体部	
122	015-01	SR2・Ⅰ層	須恵器短頸壺	□縁3/4体部	
123	015-03	SR2・Ⅰ層	須恵器杯身	□縁1/2体部	
124	012-01	SR2・Ⅰ層	須恵器大甕	□縁1/3	
125	016-01	SR2・Ⅰ層	須恵器有頭鉢	□縁1/2	
126	052-06	SR2・層不明	弥生土器壺	□縁1/12	
127	053-01	SR2・層不明	弥生土器壺	□縁完存	
128	066-02	SR2・層不明	弥生土器壺	□縁小片頸部2/5	
129	060-02	SR2・層不明	土師器ヒサゴ壺	□縁完存体部3/4	
130	013-01	SR2・層不明	土師器高杯	完存	
131	013-03	SR2・層不明	土師器高杯	完存	
132	057-03	SR2・層不明	土師器丸底壺	体部完存	
133	057-02	SR2・層不明	須恵器鉢	体部	
134	015-02	SR2・層不明	須恵器有蓋高杯蓋	2/5	
135	010-02	SR2・層不明	須恵器杯身	1/3	
136	073-05	SR2・層不明	須恵器杯身	□縁1/8	
137	063-03	SR2・層不明	土師土師質	完存	
138	022-06	SR2・層不明	土師器高杯	脚1/2	
139	059-10	SR2	石錘	完存	
140	059-03	SR2	管玉	完存	
141	059-01	SR2	滑石製勾玉	完存	
142	059-07	SR2	滑石製臼玉	完存	
143	059-08	SR2	滑石製臼玉	完存	
144	059-05	SR2	滑石製臼玉	完存	
145	059-06	SR2	滑石製臼玉	完存	
146	059-09	SR2	滑石製臼玉	完存	
147	001-02	包含層	縄文土器	小片	
148	001-03	包含層	縄文土器	小片	
149	002-01	包含層	弥生土器壺	□縁1/6	
150	014-02	包含層	土師器高杯	杯部完存	
151	010-04	包含層	土師器高杯	脚3/4	
152	011-01	包含層	土師器S字甕	□縁2/3	
153	013-02	包含層	須恵器杯蓋	1/3	
154	010-03	包含層	須恵器杯蓋	□縁1/6	
155	010-01	包含層	須恵器杯身	□縁2/3	
156	073-03	包含層	須恵器杯蓋	□縁1/3	
157	073-02	包含層	須恵器杯蓋	□縁1/5	
158	073-04	包含層	須恵器杯身	□縁小片	
159	013-04	包含層	須恵器杯身	高台1/4	
160	014-01	包含層	土師器甕	□縁片	
161	063-04	包含層	砥石	破片	
162	058-01	包含層	軒平瓦	破片	
163	001-01	包含層	軒平瓦	破片	

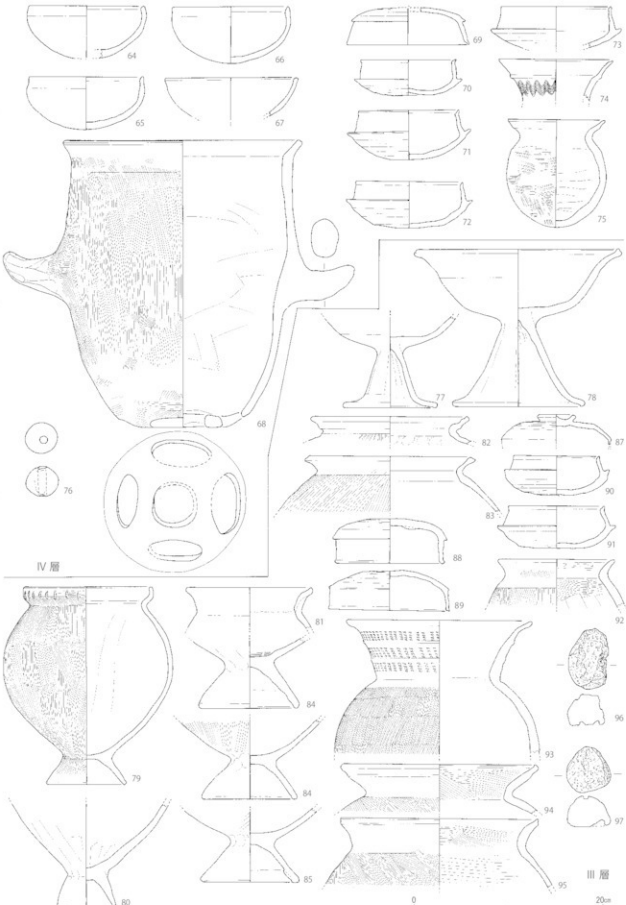
表1－(2)　遺物一覧表



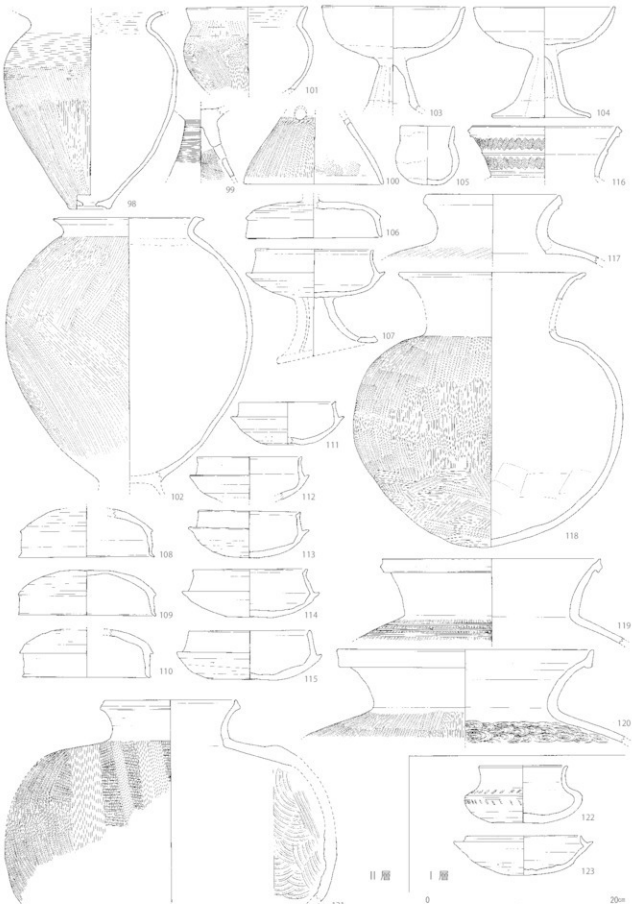
第12図　SR1・2出土遺物 (1・2は1：3、8は1：1、その他は1：4)



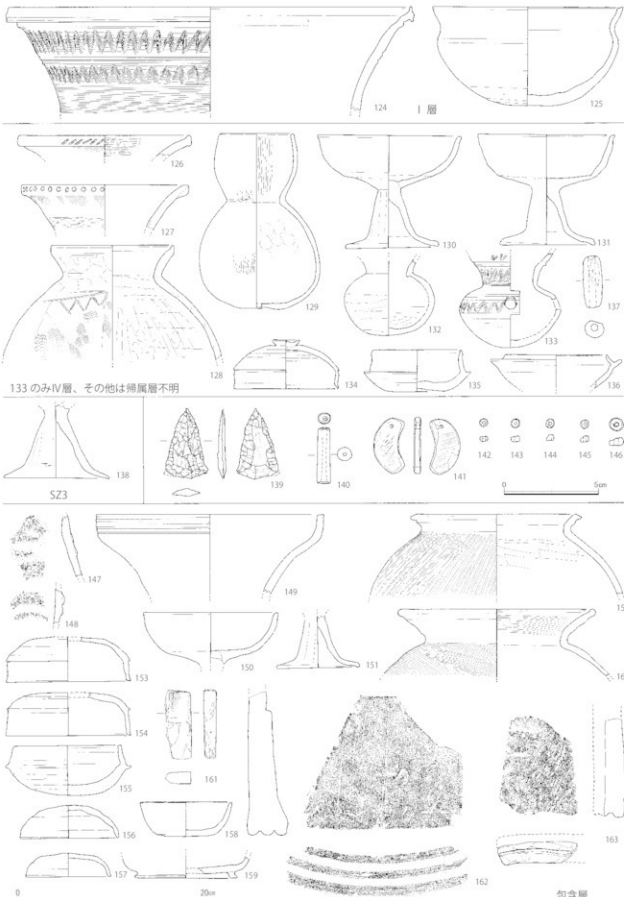
第 13 図　SR2 出土遺物 (1：4)



第 14 図　SR2 出土遺物 (1：4)



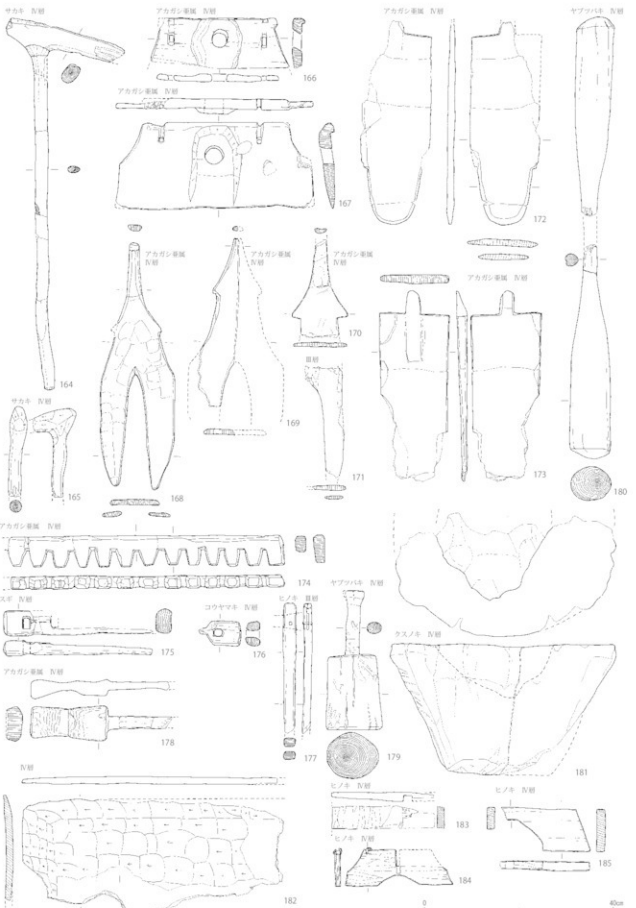
第 15 図　SR2 出土遺物 (1：4)



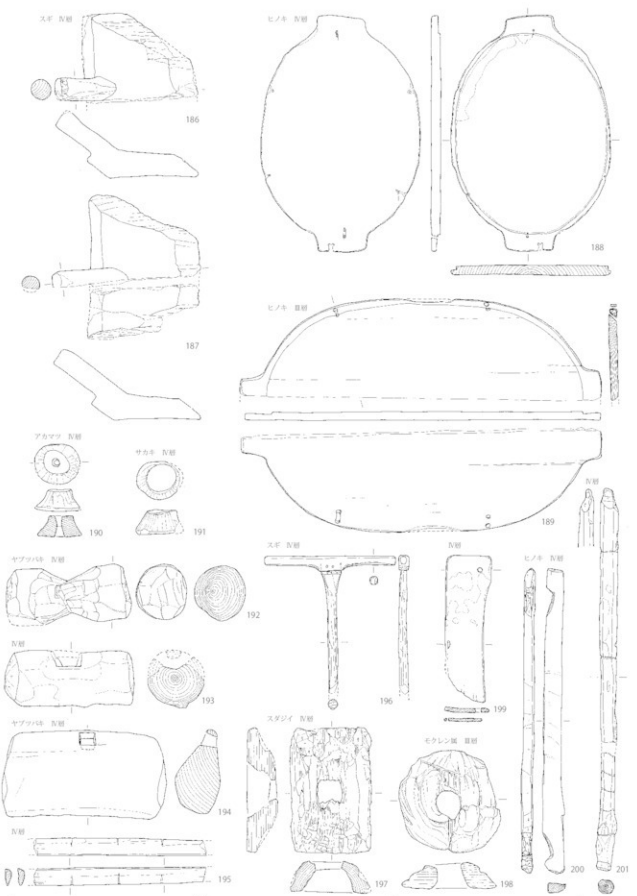
第 16 図　SR2・包含層 出土遺物 (139 ～ 146 は 1 : 2、その他は 1 : 4)

遺物番号	実測番号	出土遺構 出土位置	器種	樹種	備考
164	1082-01	SR2・Ⅳ層	工具柄	サカキ	板状鉄斧用
165	1065-02	SR2・Ⅳ層	工具柄	サカキ	袋状鉄斧用
166	1007-01	SR2・Ⅳ層	直柄広鍬	アカガシ亜属	
167	1059-01	SR2・Ⅳ層	直柄広鍬	アカガシ亜属	
168	1072-01	SR2・Ⅳ層	ナスビ形曲柄曲柄又鍬	アカガシ亜属	
169	1019-01	SR2・Ⅳ層	ナスビ形曲柄曲柄又鍬	アカガシ亜属	
170	1018-01	SR2・Ⅳ層	ナスビ形曲柄曲柄平鍬	アカガシ亜属	
171	1012-01	SR2・Ⅳ層	ナスビ形曲柄曲柄又鍬		
172	1008-01	SR2・Ⅳ層	組み合わせ鍬身	アカガシ亜属	
173	1005-01	SR2・Ⅳ層	組み合わせ鍬身	アカガシ亜属	
174	1030-01	SR2・Ⅳ層	エブリ	アカガシ亜属	
175	1026-01	SR2・Ⅳ層	方形枠付田下駄	スギ	
176	1075-02	SR2・Ⅳ層	方形枠付田下駄	コウヤマキ	
177	1023-01	SR2・Ⅳ層	鎌柄	ヒノキ	
178	1074-01	SR2・Ⅳ層	打ち鍬	アカガシ亜属	
179	1002-01	SR2・Ⅳ層	横槌	ヤブツバキ	
180	1057-01	SR2・Ⅳ層	竪杵	ヤブツバキ	
181	1056-01	SR2・Ⅳ層	臼	クスノキ	
182	1034-03	SR2・Ⅳ層	槽		
183	1028-01	SR2・Ⅳ層	槽	ヒノキ	
184	1061-03	SR2・Ⅳ層	槽	ヒノキ	
185	1006-01	SR2・Ⅳ層	槽	ヒノキ	
186	1077-01	SR2・Ⅳ層	把手付刳物容器	スギ	
187	1077-02	SR2・Ⅳ層	把手付刳物容器	スギ	
188	1031-01	SR2・Ⅲ層	曲物	ヒノキ	
189	1033-01	SR2・Ⅲ層	曲物	ヒノキ	
190	1010-01	SR2・Ⅳ層	紡織具 紡錘車	アカマツ	
191	1062-01	SR2・Ⅳ層	紡織具 紡錘車	サカキ	
192	1004-01	SR2・Ⅳ層	紡織具 木錘	ヤブツバキ	
193	1066-01	SR2・Ⅳ層	紡織具 木錘		
194	1081-02	SR2・Ⅳ層	紡織具 木錘	ヤブツバキ	
195	1063-02	SR2・Ⅳ層	紡織具 編台目盛り板		
196	1001-01	SR2・Ⅳ層	紡織具 杼	スギ	
197	1070-02	SR2・Ⅳ層	紡織具 タタリ	スダジイ	
198	1009-01	SR2・Ⅲ層	紡織具 タタリ	モクレン属	
199	1064-02	SR2・Ⅳ層	機織具		
200	1037-01	SR2・Ⅳ層	機織具	ヒノキ	
201	1083-01	SR2・Ⅳ層	機織具		
202	1021-01	SR2・Ⅳ層	刀剣	スギ	
203	1029-01	SR2・Ⅳ層	武器形 刀形	ヒノキ	
204	1015-01	SR2・Ⅳ層	武器形 刀形	ヒノキ	
205	1061-01	SR2・Ⅳ層	武器形 刀形		
206	1073-01	SR2・Ⅳ層	武器形 刀形	ヒノキ	
207	1017-01	SR2・Ⅳ層	武器形 刀形	ヒノキ	
208	1079-02	SR2・Ⅳ層	武器形 儀形	ヒノキ	
209	1073-02	SR2・Ⅳ層	武器形 儀形	ヒノキ	
210	1075-01	SR2・Ⅳ層	武器形 儀形	コウヤマキ	
211	1024-02	SR2・Ⅳ層	武器形 儀形	ヒノキ	
212	1024-01	SR2・Ⅳ層	武器形 儀形	ヒノキ	
213	1038-02	SR2・Ⅳ層	武器形 儀形	ヒノキ	
214	1086-01	SR2・Ⅳ層	儀仗	サカキ	
215	1070-03	SR2・Ⅳ層	男星形		
216	1079-01	SR2・Ⅳ層	儀具		
217	1069-02	SR2・Ⅳ層	儀具		
218	1061-04	SR2・Ⅳ層	儀具	スダジイ	
219	1069-01	SR2・Ⅳ層	儀具		
220	1063-03	SR2・Ⅳ層	儀具		
221	1058-01	SR2・Ⅳ層	儀具		
222	1003-01	SR2・Ⅲ層	儀具		
223	1071-01	SR2・Ⅳ層	建築部材 板材		
224	1040-02	SR2・Ⅳ層	建築部材 板材	スダジイ	
225	1076-01	SR2・Ⅳ層	建築部材 板材		
226	1055-01	SR2・Ⅲ層	建築部材 板材	アカガシ亜属	
227	1053-01	SR2・Ⅳ層	建築部材 横架材	クリ	

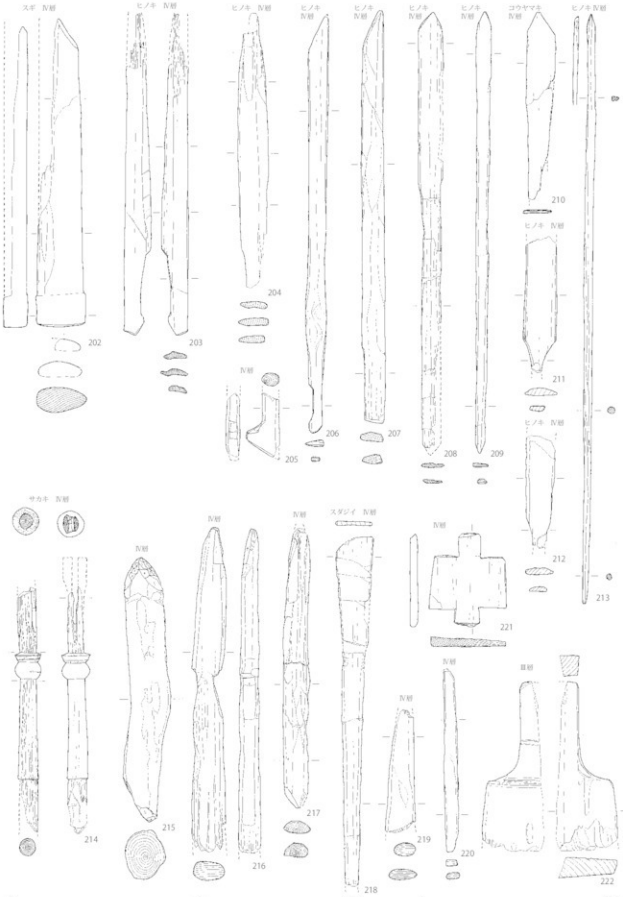
遺物番号	実測番号	出土遺構 出土位置	器種	樹種	備考
228	1085-01	SR2・Ⅳ層	建築部材 横架材	アカガシ亜属	
229	1035-01	SR2・Ⅳ層	建築部材 横架材	サカキ	
230	1044-01	SR2・Ⅳ層	建築部材 横架材	サカキ	
231	1051-02	SR2・Ⅳ層	建築部材 踏放し	ツブラジイ	
232	1046-01	SR2・Ⅳ層	建築部材 柱材	クリ	
233	1042-01	SR2・Ⅳ層	建築部材 柱材		
234	1041-01	SR2・Ⅳ層	建築部材 柱材	クリ	
235	1043-01	SR2・Ⅳ層	建築部材 柱材	シャシャンボ	
236	1050-01	SR2・Ⅳ層	建築部材 柱材		
237	1054-01	SR2・Ⅳ層	建築部材 柱材		
238	1047-01	SR2・層不明	建築部材 柱材		
239	1036-01	SR2・Ⅳ層	建築部材等 垂木・下地		
240	1049-01	SR2・Ⅳ層	建築部材等 垂木・下地		
241	1057-02	SR2・Ⅳ層	建築部材等 垂木・下地		
242	1038-01	SR2・Ⅳ層	建築部材等 垂木・下地	ヒサカキ	
243	1048-01	SR2・Ⅳ層	建築部材等 垂木・下地	ヒサカキ	
244	1038-03	SR2・Ⅳ層	建築部材等 垂木・下地		
245	1040-01	SR2・Ⅳ層	建築部材等 垂木・下地		
246	1052-01	SR2・Ⅳ層	建築部材等 垂木・下地		
247	1039-01	SR2・Ⅳ層	建築部材等 垂木・下地		
248	1045-01	SR2・Ⅳ層	建築部材等 垂木・下地		
249	1014-01	SR2・Ⅳ層	有頭棒	ヒノキ	
250	1027-01	SR2・Ⅳ層	不明	ヒノキ	
251	1058-02	SR2・Ⅳ層	不明		
252	1061-02	SR2・Ⅳ層	不明		
253	1029-02	SR2・Ⅳ層	不明		
254	1063-01	SR2・Ⅳ層	不明		
255	1064-01	SR2・Ⅳ層	不明		
256	1034-01	SR2・Ⅳ層	不明		
257	1034-02	SR2・Ⅳ層	柄	ヒノキ	
258	1062-03	SR2・Ⅳ層	柄	ヒサカキ	
259	1045-02	SR2・Ⅳ層	柄	ヒノキ	
260	1050-02	SR2・Ⅳ層	杭		
261	1025-01	SR2・Ⅳ層	杭	ヒノキ	
262	1067-02	SR2・Ⅳ層	杭		
263	1067-01	SR2・Ⅳ層	杭		
264	1051-01	SR2・Ⅳ層	杭		
265	1065-01	SR2・Ⅳ層	杭		
266	1068-02	SR2・最下層(Ⅴ層)	不明		
267	1037-02	SR2・Ⅳ層	不明		
268	1062-02	SR2・Ⅳ層	不明		
269	1020-01	SR2・Ⅳ層	不明		
270	1060-01	SR2・Ⅳ層	不明		
271	1068-01	SR2・Ⅳ層	不明		
272	1072-02	SR2・Ⅳ層	不明		
273	1022-01	SR2・Ⅳ層	不明		
274	1013-01	SR2・Ⅳ層	不明		
275	1011-01	SR2・Ⅲ層	不明	サカキ	
276	1081-01	SR2・Ⅳ層	不明		
277	1084-01	SR2・Ⅳ層	不明		
278	1016-01	SR2・Ⅳ層	不明		
279	1078-01	SR2・Ⅳ層	不明	スギ	
280	1080-01	SR2・Ⅳ層	不明		
281	1070-01	SR2・Ⅳ層	不明		
282	1060-02	SR2・Ⅳ層	不明		
283	1066-02	SR2・Ⅳ層	不明		



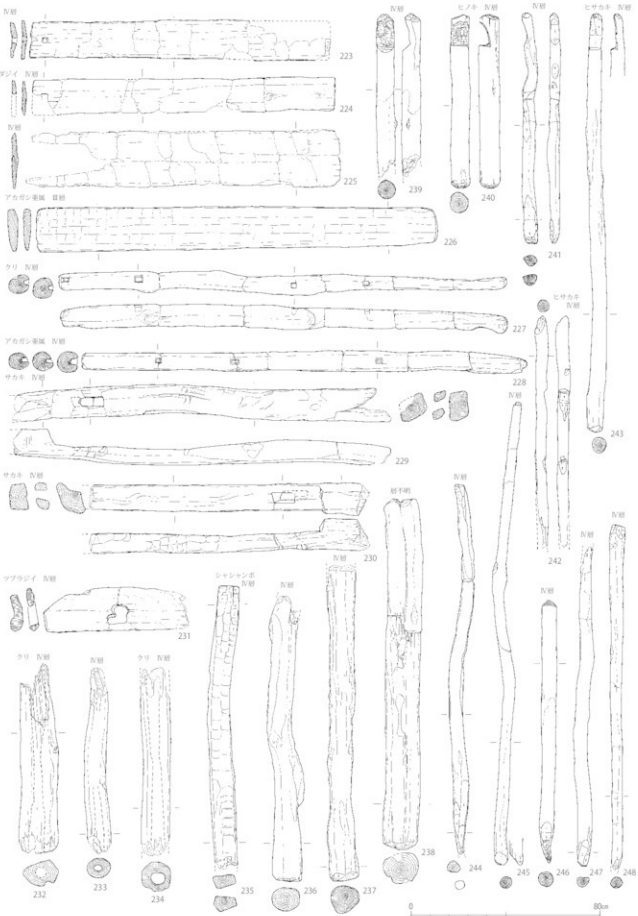
第17図　SR2出土木製品（1：8）



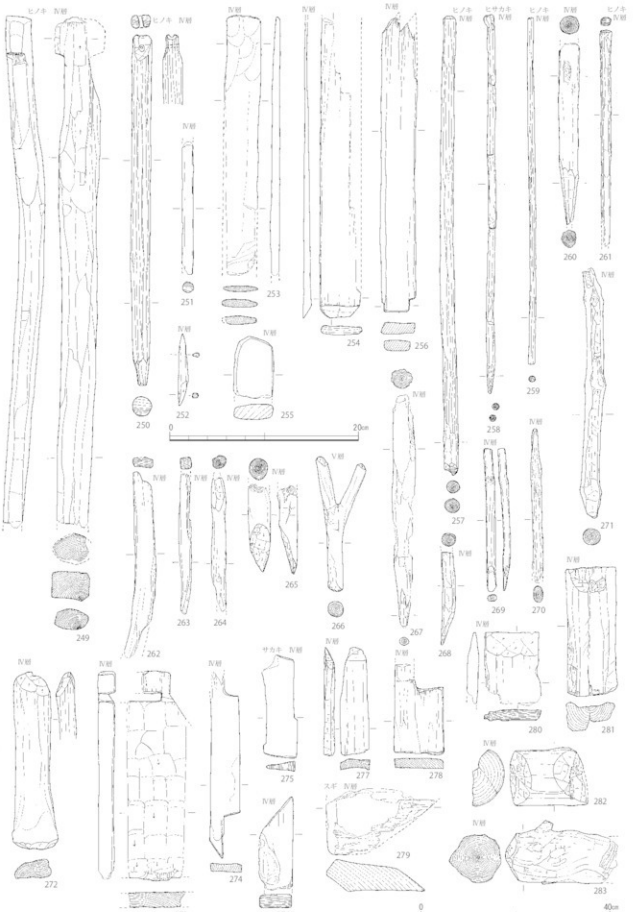
第 18 図　SR2 出土木製品 (186 ～ 195 は 1：4、196 ～ 201 は 1：8)



第 19 図　SR2 出土木製品 (213・215 のみ 1：8、その他は 1：4)



第 20 図　SR2 出土木製品 (1：16)



第 21 図　SR2 出土木製品 (249 ～ 255 は 1：4、256 ～ 283 は 1：8)

Ⅳ　県道C地区(橋垣内地内)の調査

1　層序

C地区の基本的な層序は、第1層が褐色土の耕土、第2層が青灰色または暗灰色の耕土、第3層が褐色または褐灰色の旧耕土、第４層が淡褐色または黄灰色の旧耕土、第５層が灰褐色または濃黄灰色系の砂質土または細砂、第６層が灰色粘質土、第７層が黒色または黒灰色の粘質土、第８層が淡黄色粘質土である。

第１・２層の耕土はほぼ全面にみられ、第３・４層の旧耕土・旧床土は調査区南側のみにみられる。第５・６層が遺物包含層で、ほぼ全面にみられる。第７層は南側や北端に堆積するが、中央部付近ではみられない。遺構は第７層上面から切り込んでおり、第7層以下が無遺物層となる。

2　遺構

遺構は、掘立柱建物35棟、井戸２基、溝７条、土坑３基、ピット多数を検出した。時代は飛鳥、奈良、平安、江戸の各時代に大別することができる。時代区分については、混乱を避けるために特に支障の無い限り中勢道路橋垣内遺跡調査報告[3]に準じている。

各遺構の規模等については、第３・４表に示したとおりである。

黒色土の検出面に黒色土の遺構埋土の場所もあり、検出は困難を極め、見落としが有るかも知れない。また、掘立柱建物のピットのなかには極端に小さいものもあるが、それは柱掘形が確認できず柱痕跡のみを検出したためであろう。番号を付したピットは遺物が出土したピットである。

（1）飛鳥時代の遺構

ここでいう飛鳥時代は、概ね７世紀代であり、古墳時代の須恵器編年で扱われるいわゆる古墳時代終焉期を含めた時期である。

①掘立柱建物

掘立柱建物は16棟確認したが、出土遺物により田辺編年[20]のＴＫ209型式併行期の時期すなわち概ね７世紀初頭～前半と、ＴＫ217型式古段階併行期の時期すなわち概ね７世紀前半～中頃に分けることができる。

ＴＫ209型式併行期の時期の掘立柱建物はＳＢ22・27・34・36～38・47・48・56の９棟である。ＳＢ34の柱掘形の平面形が瓢箪形や不定形であることから、柱抜き取り痕と考えられる。なお、ＳＢ38からはＴＫ43型式併行期の須恵器蓋が１点出土しているが、建物範囲上面の遺物包含層からはＴＫ209・ＴＫ217型式古段階併行期の時期の須恵器が出土しており、ＳＢ38が単独で他の掘立柱建物よりも古い時期とするより、飛鳥時代とするほうが自然と考えた。

ＳＢ47は出土遺物は皆無であるが、ＳＢ48とは4.2m程離れて棟方向を揃えており、同時期と考えた。

ＴＫ217型式古段階併行期の時期の掘立柱建物はＳＢ20・21・24・25・31・33・50・53・54の９棟である。ＳＢ20は、出土遺物は無いが、西側梁行がＳＢ21の東側梁行の延長線上にあり、その距離が3.6mと計画的な配置が窺えることから、同時期の建物と判断した。

②溝

ＳＤ２　ＴＫ217型式新段階併行期、すなわち７世紀中頃から後半の須恵器が出土している。

ＳＤ４　残存長は1.2m程であるが、検出時には掘立柱建物ＳＢ27の南側桁行のほぼ全体にわたって非常に浅く、溝状の遺構として確認できたものであり、布掘の可能性がある。ＴＫ217型式古段階併行期の須恵器杯身が何点か出土しており、またＴＫ217型式新段階併行期の須恵器杯身・杯蓋も若干出土している。

ＳＤ７　中勢道路橋垣内調査報告ではＳＤ39とされているもので、中勢道路調査区で検出した他の溝とともに飛鳥時代の居住群を区画して囲む溝とされているものである。今回の調査ではＴＫ43型式・ＴＫ209型式・ＴＫ217型式古段階各併行期の時期の須恵器杯身が出土している。

ＳＤ10　出土遺物は土師器の小片であるが、切り合いによりＳＢ38・41よりも古く、一応飛鳥時代とした。

③土坑

ＳＫ１　ＴＫ217型式古段階併行期の須恵器杯が出土している。

（2）飛鳥時代または奈良時代の遺構

土師器、須恵器の小片が出土しているが、遺物からは詳細な時期は確定できないため、飛鳥時代または奈良時代とした遺構である。

①掘立柱建物

ＳＢ29・43・44・46・51・55の６棟である。

②土坑

ＳＫ６の１基である。

（３）奈良時代の遺構

①掘立柱建物

ＳＢ23・30の２棟である。

②井戸

ＳＥ８　平面形は径３～４ｍの楕円形で、深さは1.2ｍである。横板井籠組で、縦115～120㎝×横16～29㎝、厚さ５㎝程の横板の両端の上下に溝状に切り込みを入れて井桁に組んでおり、拳大の石を裏込めする。宇野分類のBⅣ類d類である。下から４段までは完存しており、その上はかなり崩壊していたが６段目まで確認することができた。掘形埋土は第１層が暗褐色または黒灰色の粘質土、第２層が暗灰色または黒灰色粘質土に青灰白色シルトがブロックで混入、第３層は淡青灰白シルトに黒灰色粘土がブロックで混入している。

③溝

ＳＤ５　中勢道路調査区でＳＤ86とされている溝の延長である。今回の調査区ではＴＫ217型式古段階併行期に相当する須恵器杯が出土しているが、中勢道路調査区では奈良時代の土器が相当数出土しており、遺構の時期は奈良時代と判断した。

④土坑

ＳＫ11　奈良時代の須恵器杯身が出土している。

（４）飛鳥時代、奈良時代、平安時代のいずれかの遺構

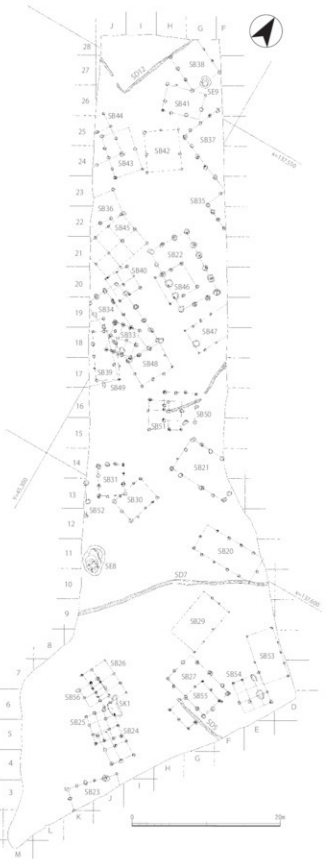
①掘立柱建物

出土遺物からは詳細な時期を確定できなかったが、平面形態が側柱建物または古代の倉庫風の総柱建物であることから、飛鳥・奈良・平安時代のいずれかの遺構と判断したものである。掘立柱建物は７棟確認した。ＳＢ26・35・40～42・49・52からは土師器小片が出土している。

（５）平安時代の遺構

①掘立柱建物

ＳＢ39　柱掘形Ｋ１８Ｐ２から灰釉陶器が出土しているため平安時代の遺構と判断した。他のピットからは飛鳥時代のＴＫ209型式併行期の時期などの須恵器も出土している。側柱建物であることを考える

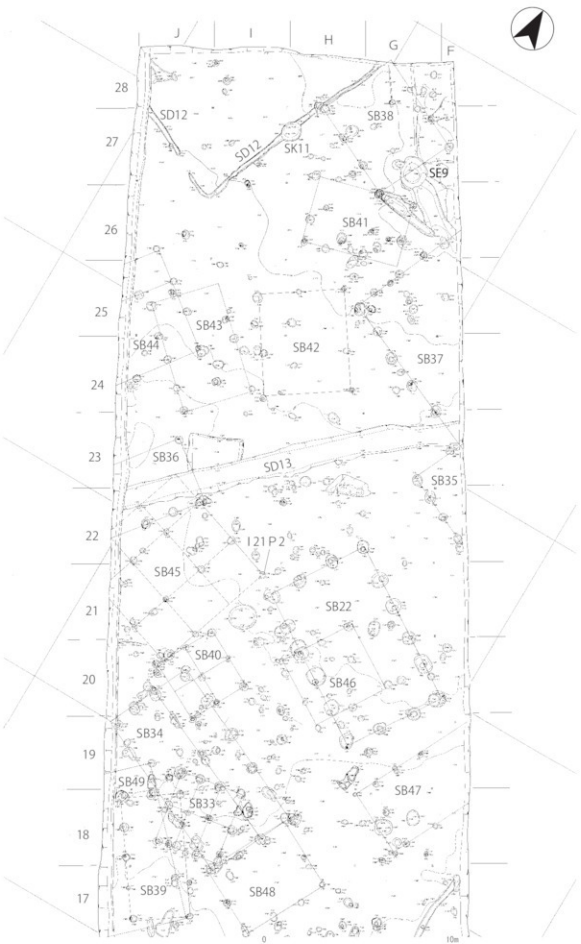


第 22 図　建物配置図 (1：500)

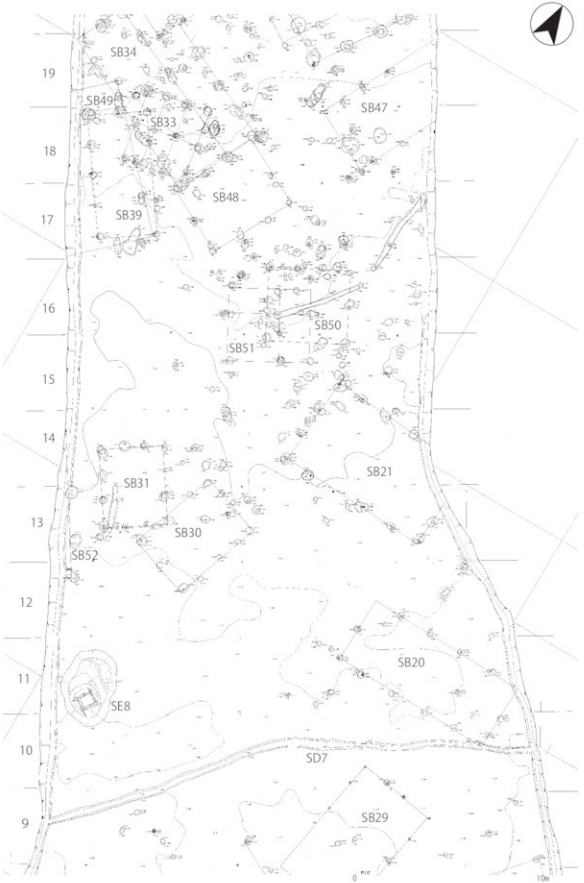
遺構番号	規模（間） 規模（m）	桁行柱間寸法(m) 梁行柱間寸法(m)	棟方向 方位	柱穴(m)	柱痕(柱) 柱根	柱穴名	時代(主な出土遺物)	旧番号	備考
SB20	5間×2間 8.7×3.6	1.5+1.8+1.8+1.8+1.8 1.8+1.8	東西棟 E-27°-S	0.3 円形	0.2 柱根残存	なし	飛鳥TK217（なし）	SB20 23	
SB21	5間×1間 8.1×4.8	1.5+1.5+1.8+1.8+1.5 1.5+1.5+1.8	東西棟 E-4°-S	0.5～0.7 円形	0.2～0.3 柱根残存	F13P1、G13P1・2、F14P1、G15P4・5、H14P1・2	飛鳥TK217（土師器、須恵器杯身・杯蓋）	SB21 20	
SB22	5間以上×3間 9.2×5.5	2.0+1.6+1.8+1.6+2.2 1.8+1.8+1.9	東西棟 E-33°-S	0.7～1.0 円・方形	0.2～0.3 柱根残存	G19P2、H19P2、G20P1・4、H20P1・2、I21P1	飛鳥TK209（土師器高杯、須恵器杯身）	SB22 9	
SB23	5間×2間以上 6.9×3.0以上	1.5+1.2+1.2+1.5+1.5 α+1.5+1.5	南北棟 N-44°-E	0.3～0.5 円形	0.2	J4P4	奈良(土師器盤・甕)	SB23 33	
SB24	2間×2間 総柱 4.2×3.0	2.1+2.1 1.8+1.2	東西棟 E-33°-S	0.4～0.6 円形	0.2	14P 1、J4P 2、J5P2・3・5・6	飛鳥TK217（土師器、須恵器杯身・杯蓋・高杯・甕、炭化物）	SB24 32	
SB25	3間×3間 総柱 3.9×3.6	1.2+1.5+1.2 1.2+1.2+1.2	東西棟 E-42°-S	0.4 円形	0.2	J5P4・7・8、J6P2・4、K6P1	飛鳥TK217（土師器、須恵器杯身・蓋・甕、炭化物）	SB25 31	SB26との切合不明
SB26	3間×2間 5.0×3.5	2.0+1.5+1.5 1.4+2.1	東西棟 E-27°-S	0.2～0.4 円形	0.2	J7P1・3、K7P2・4	飛鳥～平安（土師器）	SB26	SB25との切合不明
SB27	4間×3間 7.2×4.5	1.2+2.4+2.4+1.2 1.5+1.5+1.5	東西棟 E-15°-S	0.4～0.7 円形	0.2～0.3	G6P1・2・4、H6P3、G7P1・2、H7P1	飛鳥TK209（土師器、須恵器蓋）	SB27 27	
**28		欠番						SB28	
SB29	4間×3間 9.0×4.2	1.8+2.1+2.1+1.5+1.5 1.8+1.2+1.2	南北棟 N-10°-E	0.3 円形	0.2 柱根残存	G10P1	飛鳥～奈良（土師器、須恵器）	SB29 24	
SB30	4間×2間 5.1×3.6	1.2+1.2+1.5+1.2 1.8+1.8	南北棟 N-20°-E	0.3～0.7 円形	0.3	H13P1、J13P1、I14P1	奈良（土師器長胴甕）	SB30 22	
SB31	3間×3間 4.2×3.6	1.2+1.5+1.5 1.2+1.2+1.2	南北棟 N-34°-W	0.3～0.7 円形	0.2	J13P2・3・4・5・6、J14P1、J15P2	飛鳥TK217（土師器、須恵器杯・蓋）	SB31 21	
**32		欠番						SB32	
SB33	3間×2間 総柱 3.4×3.8	1.0+1.2+1.2 1.8+2.0	東西棟 E-10°-S	0.4～0.5 円形	0.2～0.3	I18P6・8・9・10、J18P1・3・4・6、J19P8	飛鳥TK217（土師器、須恵器杯身・蓋・甕）	SB33 16	SB34との切合不明
SB34	5間×2間＋庇 9.8×3.0＋1.8	2.1+2.1+2.4+1.6+1.6 1.5+1.5+1.8	東西棟 E-25°-S	0.5～0.8 円形	0.3	H18P1・2、I18P7、J18P2・5・3、I19P2、J19P1・6	飛鳥TK209（土師器、須恵器杯身）	SB34 13	SB48との切合不明 SB33との切合不明
SB35	3間以上×1間以上 3.9以上×2.4以上	1.3+1.3+1.3+ 2.4+	東西棟 E-25°-S	0.4～0.6 円形	0.2	G22P1、G23P1	飛鳥～平安（土師器）	SB35 6	
SB36	3間以上×廂定2間 3.6以上×3.6	α+1.8+1.8 2間で3.6	南北棟 N-37°-E	0.5 円形	0.2～0.3	J22P2・3	飛鳥TK209（土師器、須恵器杯蓋）	SB36 7	SB45より古
SB37	5間以上×3間以上 9.0以上×5.7以上	1.8+1.5+1.8+1.8+2.1+α 2.1+2.1+1.5+α	南北棟 E-23°-S	0.4～0.7 円形	0.3 柱根残存	G24P 1、G25P 3・4・6、H25P 1、G26P1・4	飛鳥TK209（土師器、須恵器杯蓋・甕）	SB37 SA34	
SB38	3間以上×廂2間 5.5以上×4.4	2.0+1.9+1.6 2間で4.4	東西棟 E-25°-S	0.3～0.5 円形	0.2	G26P3、G27P1・2、H27P1・2、H28P1・2・3	飛鳥TK209（土師器、須恵器杯蓋、炭化物）	SB38	SB41との切合不明 SD10より新 SE9より古
SB39	4間×2間 6.6×3.2	1.6+1.6+1.6+1.8 1.6+1.6	南北棟 N-36°-W	0.3～0.4 円形	0.2	I17P1・2・4、J18P7、K18P1・2	平安（土師器、須恵器杯蓋・甕、灰釉陶器）	SB39 15	SB49との切合不明
SB40	2間×2間 総柱 3.4×3.4	1.7+1.7 1.7+1.7	東西棟 E-29°-S	0.3～0.4 円形	0.2	J19P5、I20P1	飛鳥～平安（土師器）	SB40 12	
SB41	3間×2間 5.1×3.3	1.2+2.1+1.8 2.1+1.2	東西棟 E-15°-N	0.4 円形	0.2	G26P3、H26P1	飛鳥～平安（土師器）	2	SB38との切合不明 SD10より新
SB42	3間×2間 5.4×4.5	2間で3.3+2.1 2.25+2.25	南北棟 N-34°-W	0.3～0.5 円形	0.2	H25P2	飛鳥～平安（土師器）	3	
SB43	4間×廂2間 6.0×3.6	1.8+1.2+1.5+1.5 1.2+2間で2.4	東西棟 E-43°-S	0.3～0.4 方形	0.2	J24P3、J25P2・4	飛鳥～奈良（土師器、須恵器）	4	
SB44	2間以上×2間＋庇 1.9以上×5.7	1.8+2.1+α 2.1+1.8+間1.8	東西棟 N-35°-E	0.3～0.4 方形	0.2	J24P1・2、J25P1・3	飛鳥～奈良（土師器、須恵器杯・蓋）	5	
SB45	3間×3間 総柱 7.0×7.1	2.4+2.4+2.2 2.0+2.7+2.4	東西棟 E-19°-S	0.3～0.4 円形	0.2	J20P3、J21P1、I21P2、I22P1、J22P1・4、K22P1	平安（土師器小皿・甕、須恵器、緑釉陶器、山茶椀、白磁椀（297））	8	SB36より新
SB46	2間×2間 4.2×3.9	1.8+2.4 1.3+2.6	南北棟 E-32°-S	0.3～0.5 円形	0.2	G26P3、H26P5、J20P4	飛鳥～奈良（土師器、須恵器、土錘）	10	
SB47	3間以上×廂定2間 4.2以上×3.6	1.2+1.2+1.8+α 2間で3.6	南北棟 N-26°-E	0.2～0.3 円形	0.2	なし	飛鳥TK209	11	
SB48	3間×2間 4.8×3.9	1.5+1.5+1.8 2.1+1.8	南北棟 N-25°-E	0.3～0.6 円形	0.2	I17P2・3、H18P1	飛鳥TK209（土師器、須恵器杯蓋）	17	SB34との切合不明
SB49	4間×2間以上 8.4×2.1以上	2.7+1.8+1.8+2.1 2.1+α	南北棟 N-42°-W	0.3～0.4 円形	0.2	J17P1	飛鳥～平安（土師器）	14	SB39との切合不明
SB50	3間×2間 4.2×3.9	1.5+1.+1.5 1.8+2.1	東西棟 E-27°-N	0.3～0.5 円形	0.2	G15P1、H15P4、H16P2・3・9・10	飛鳥TK217（土師器、須恵器杯身）	18	
SB51	2間×2間 総柱 4.2×3.9	2.7+1.5 1.35+2.55	東西棟 E-29°-N	0.4 円形	0.2～0.3	H15P3、I15P2、H16P4	飛鳥～奈良（土師器、須恵器）	19	
SB52	2間以上×？ 4.2×不明	1.8+2.4+α α	南北棟 N-34°-W	0.7 円形	不明	K12P1・2、K13P1	飛鳥～平安（なし）	SA35	
SB53	4間×廂定2間 6.9×3.6	2.1+1.35+1.35+2.1 2間で3.6	東西棟 E-41°-S	0.3 円形	0.2	D7P2、E7P3、E9P1	飛鳥TK217（土師器、須恵器杯身）	25	SB53との切合不明
SB54	2間×2間 総柱 4.1×3.9	2.75+1.35 1.5+2.4	東西棟 E-38°-S	0.3～0.5 円形	0.2	E6P1・2、E7P1、F7P1	飛鳥TK217（土師器高杯、須恵器杯蓋）	26	SB53との切合不明
SB55	4間×2間 5.7×3.6	1.2+1.5+1.8+1.2 1.8+1.8	南北棟 N-19°-E	0.3～0.5 円形	0.2	G6P1・2、H6P2	飛鳥～奈良（土師器、須恵器）	28	
SB56	2間×2間　総柱 3．0×2．7	1.2+1.8 1.35+1.35	南北棟 N-29°-E	0.3～0.6 円形	0.2	J6P3・5、K6P3、J7P2	飛鳥TK209（土師器蓋、須恵器杯身・蓋、炭化物）	30	

第３表　Ｃ地区掘立柱建物一覧表

※旧番号の上段は発掘調査時遺構番号、下段は中勢道路報告書での仮番号

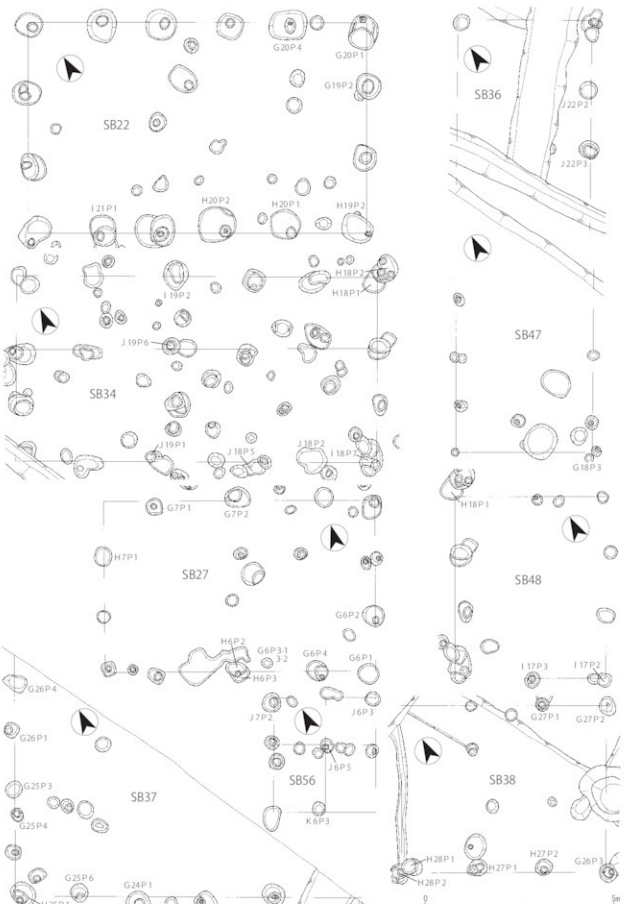


第 23 図　C 地区遺構平面図 1 (1：200)

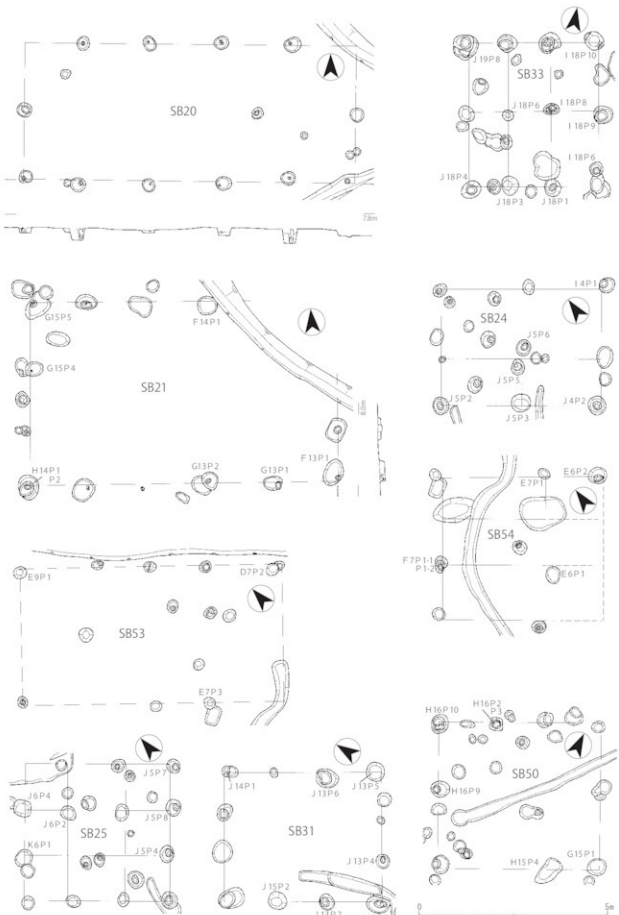


第 24 図　C 地区遺構平面図 2 (1：200)

第 25 図　C 地区遺構平面図 3 (1：200)



第 26 図　SB22・27・34・36 ～ 38・47・48・56 平面図 (1：100)



第 27 図　SB20・21・24・25・31・33・50・53・54 平面図 (1：100)

と遺構の時期は平安時代の前～中期であろう。

ＳＢ45　２間×２間、あるいは東にもう１間のびて３間×２間の可能性もある総柱建物である。出土遺物には、白磁椀（297）、緑釉陶器、平安時代の土師器甕、山茶椀質の陶器があり、11世紀中葉～12世紀前半の建物と考えられる。

②井戸

ＳＥ９　平面形は径1.3～1.8mの楕円形で、深さは2.3mである。埋土は第１層が黒灰色粘質土に灰白色粘質土がブロックで混入、第２層が黒灰色粘質土、第３層が暗灰色粘質土である。組石や構造木材が検出されなかったことから素掘りの井戸の可能性が高い。後述する出土遺物の時期は12世紀中葉から13世紀前半であり、埋没期を示すものであろう。

（７）江戸時代

①溝

ＳＤ12　出土遺物には江戸時代の陶器がある。

（８）時期不明

①溝

ＳＤ３　出土遺物は土師器の小片で、遺構の時期は不明である。

（９）現代

①溝

ＳＤ13　現代の溝であるが、埋土からは須恵器・土師器が少量出土している。

３　遺物

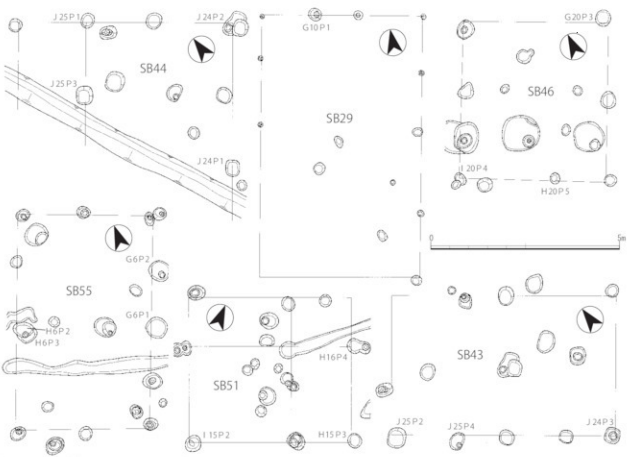
（１）遺構出土の遺物

①井戸ＳＥ８出土遺物

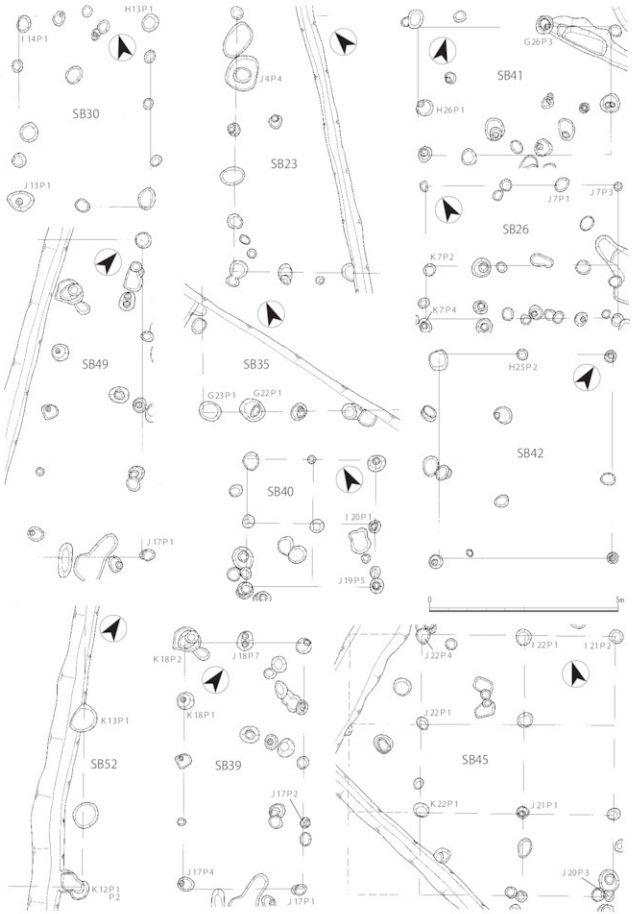
須恵器杯（284・285）　284は飛鳥時代の須恵器杯で、たちあがりは低く内傾し、受部は水平に近い。体部はロクロナデ、底部から体部にかけてはロクロケズリで、ロクロ回転は時計回りである。底部は未調整である。田辺編年のＴＫ217型式の古段階に併行する時期である。285は奈良時代の須恵器杯で、高台はやや外に開く。

土師器甕（286）　口径14cm、胴部最大径13.5cmの中型の甕である。胴部は球胴で、口縁端部は丸く、胴部の調整は内外面ともハケメである。

井戸枠横板（319～323）　横板は全部で23枚出土したが、14枚がほぼ完形である。このうち残存状況の良



第 28 図　SB29・43・44・46・51・55 平面図（1：100）



第 29 図　SB23・26・30・35・39・40・41・42・45・49・52 平面図 (1：100)

好な遺物を５枚図示し、それ以外の物はサイズ等を一覧表に記した。長さは112～120㎝、幅は16～30㎝、厚さは５㎝程で、井桁に組むために両端の上下に切り込みを入れてある。321～323などでは、板の表面に手斧痕が明瞭に残る。

モモ　図示しなかったが、モモの核が１個出土している。

②井戸ＳＥ９出土遺物

第１層からは近世陶磁器が、第２層からは伊賀焼きの陶器、山皿、土師器片が、第３層からは山茶椀、木製紡錘車が、それぞれ出土した。

土師器甕（287）口径13.5㎝、胴部最大径14.5㎝、器高13㎝の中型の甕である。胴部は球胴で、口縁端部は外面に面をもつ。調整は胴部が内外面ともハケメ、底部内面がヘラケズリである。

陶器山茶椀（288～292）体部は丸味があり、内面の底部と体部の境界は屈曲しており、口縁はわずかに外反し端部は丸い。藤澤編[227]年の６型式であり、13世紀前半におさまる時期である。

陶器山皿（293）底部は平底で、体部は斜めに立ち上がり口縁端部は丸い。藤澤編年の６型式である。

陶器鉢（294）体部下半から高台部にかけての破片で、体部下半は丸味を帯びている。体部最下部はロクロケズリである。小片のため詳細な時期は決めがたいが、概ね12世紀後半あたりと考えてよいであろう。

陶器甕（295）頸部が直立して立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸く、内側に沈線を持つ。常滑産で、赤羽・中野編[230]年の２型式期（1150～1175年）である。

青磁椀（296）龍泉窯系の青磁椀である。高台は断面四角形の削り出し高台で、底部の器壁は厚くなる。施釉は内面全面と外面の体部にみられ、高台畳付部およびその内面は露胎である。底部内面には草花文がみられる。横田・森田編[190]年のⅠ類―２で、時期はⅢ期１小期すなわち12世紀中葉から13世紀初頭のものである。

③掘立柱建物ＳＢ45出土遺物

白磁椀（297）高台の断面は四角形で、削り出し高台である。内面全面と外面の体部に施釉がみられるが、高台畳付部およびその内面は露胎である。横田・森田編年のⅣ類―２で、時期はⅡ期すなわち11世紀中葉から12世紀初頭と考えてよいであろう。

（２）表土及び遺物包含層等出土の遺物

須恵器杯蓋（298～301）口径12～13㎝、器高４㎝で、天井部と口縁部の境界は丸味を帯び、口縁端部は丸い。天井部外面は、298がロクロケズリであり、299～301がヘラ切り未調整である。ＴＫ217型式併行期である。

須恵器杯身（302～308）たちあがりは低く、内傾し、受部は水平に近い。体部の調整はいずれもロクロナデである。底部外面は302・303がロクロケズリ、304・305が一部ロクロケズリの未調整、306～308が未調整である。ＴＫ217型式併行期である。

須恵器蓋（309）口径10㎝で、口縁端部は丸い。内面にかえりをもつが、その先端は口縁部よりも下方に大きく突出する。天井部中央にはつまみがつく。天井部外面はロクロケズリである。

須恵器壷（310）高台径3.2㎝のミニチュアの壷で、奈良時代のものである。

須恵器壷（311）胴部最大径11.5㎝で、胴部は球胴状である。調整は底部がロクロケズリ、胴部がロクロナデである。

須恵器甕（312）頸部から口縁部の小片であるが、口径は36㎝前後に復元できる。口縁部はやや外反気味で、端部は丸い。頸部には２本を１単位とする沈線を施し、その間に８～９本を１単位とする波状文やカキ目を施す。

須恵器提瓶（313）体部前面は丸いが膨らみは少なく、背面はほぼ平坦である。頸部はロクロナデであるが、口縁部は欠損している。体部の前面はカキ目、背面はロクロケズリである。体部の両側の耳は環状であるが、基部のみ残存する。

須恵器杯（314）口径17㎝、器高４㎝の高台付きの杯で、奈良時代の遺物である。

ロクロ土師器椀（315）口径16㎝のロクロ製の椀である。体部は内湾気味で、口縁端部は丸い。

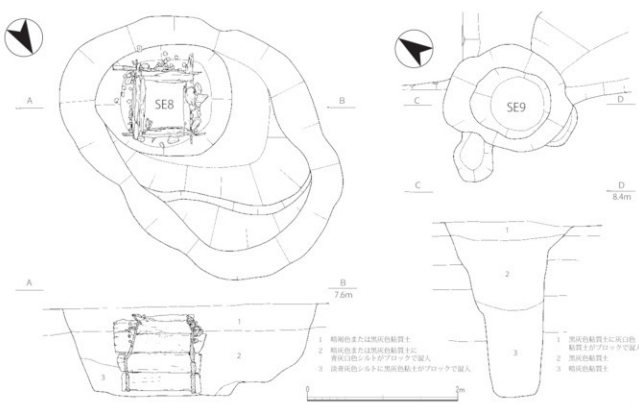
灰釉陶器（316）高台の断面は退化した三日月形をしている。底部外面はヘラケズリで、ロクロ回転は時計廻りである。折戸53号窯式[185]の前半であろう。

陶器山皿（317）底部は平底で、口縁端部は外側に面を持つ。

土錘（318）径３㎝程の球形であるが、歪みがみられる。径0.7㎝の穿孔がある。

遺構名	調査時遺構名	小地区	形状又は方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	時代	主な遺物	備考
SK 1	SK 1	J 6	不定形	3.0	1.3	0.2	飛鳥	土師器、須恵器杯、須恵器片	
SD 2	SD 2	I 5、H 5～7	N42°W	12	1.0	0.1	飛鳥	土師器甕、須恵器	
SD 3	SD 3	G 5	曲線	4.0	0.3	0.05	不明	土師器	
SD 4	SD 4	H 7、G 6	E15°S	1.2	0.8	0.1	飛鳥	土師器、須恵器杯身・杯蓋、高杯	
SD 5	SD 5	G 5・6	E14°S	8.5以上	0.4	0.1	奈良	土師器、須恵器杯	中勢調査区SD86
SK 6	SK 6	E 6	隅丸方形	1.1	0.8	0.1	飛鳥～奈良	土師器、須恵器	
SD 7	SD 7	J K 9、E～I 10	N E-S W45°～E 24°S	26	0.5	0.2	飛鳥	土師器甕、須恵器杯身・高杯・壺	
SE 8	SE 8	I 11・J 11	楕円形	4.0	3.0	1.2	奈良	須恵器杯（284・285）・壺・甕、土師器甕（286）・椀・長胴甕	
SE 9	SE 9	G27	楕円形	1.8	1.3	2.3	鎌倉	土師器甕（287）・山茶椀（288～292）、山皿（293）、陶器鉢（294）・壺（295）、青磁椀（296）	SD38より新
SD10	SD10	G26	E8°S	3.5	0.7	0.3	飛鳥以前	土師器	SD38より古 SB41より古
SK11	SK11	H27	円形	1.1		0.8	奈良	土師器、須恵器杯身	
SD12	SD12	G H28、H I J27	E25°S N25°E	17.5以上	0.3	0.05	近世	土師器、須恵器、山茶椀、青磁、近世陶器	L字溝
SD13	SD13	J 22、G～T 23	E43°N	19以上	1.4	0.6	現代	土師器、須恵器	

第４表　C地区 井戸、溝、土坑一覧表



第 30 図　SE8、SE9 平面図・断面図 (1：50)

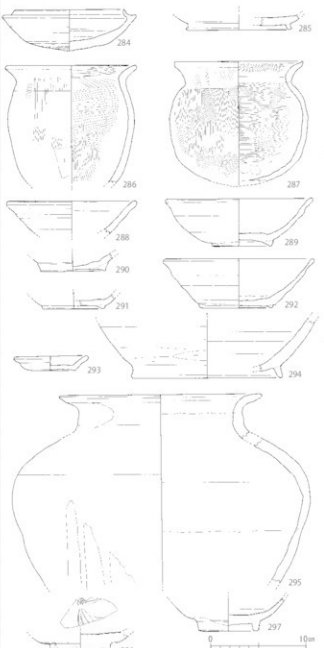
遺物番号	実測番号	出土遺構出土位置	器種	技法の特徴	残存度	備考
284	070-02	SE 8	須恵器杯身	ロクロナデ、ロクロケズリ、ヘラ切り未調整	1/4	
285	070-03	SE 8	須恵器杯身	ロクロナデ、ロクロケズリ、ヘラ切り未調整	1/3	
286	072-02	SE 8 腰形	土師器甕	ヨコナデ、ハケメ	1/6	
287	072-01	SE 9	土師器甕	ヨコナデ、ハケメ、ケズリ	1/2	二次焼成
288	070-05	SE 9	山茶椀	ロクロナデ	上半1/6	
289	056-01	SE 9	山茶椀	ロクロナデ、糸切り痕	完形	
290	071-02	SE 9	山茶椀	ロクロナデ、糸切り痕	底部1/3	
291	071-03	SE 9	山茶椀	ロクロナデ、糸切り痕	底部1/3	
292	056-02	SE 9	山茶椀	ロクロナデ、糸切り痕	ほぼ完形	
293	056-03	SE 9	山皿	ロクロナデ、糸切り痕	完形	
294	070-06	SE 9	陶器鉢	ロクロナデ、ロクロケズリ	体部下半1/8	
295	071-01	SE 9	陶器甕	ナデ、粘土板繋ぎ	上半部1/4	
296	072-04	SE 9	青磁椀	削り出し高台、施釉	底部1/3	
297	071-04	SB 45 121P 2	白磁椀	削り出し高台、内面に沈線、施釉	底部	
298	070-01	M 3表土	須恵器杯蓋	ロクロナデ、ロクロケズリ	1/3	
299	068-04	J 4包含層	須恵器杯蓋	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	完形	
300	068-06	J 4包含層	須恵器杯蓋	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	1/3	
301	062-05	J 4包含層	須恵器杯蓋	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	1/5	
302	068-01	J 4包含層	須恵器杯身	ロクロナデ、ロクロケズリ	2/3	
303	062-04	J 3包含層	須恵器杯身	ロクロナデ、ロクロケズリ	1/4	
304	070-04	L 3包含層	須恵器杯身	ロクロナデ、ロクロケズリ、ヘラ切り未調整	1/3	
305	068-05	K 3包含層	須恵器杯身	ロクロナデ、ロクロケズリ、ヘラ切り未調整	1/2	
306	062-03	K 6包含層	須恵器杯身	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	ほぼ完形	
307	068-02	J 4包含層	須恵器杯身	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	1/3	
308	062-06	J 4包含層	須恵器杯身	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	1/7	
309	068-03	J 7包含層	須恵器蓋	ロクロナデ	完形	
310	063-02	G 6包含層	須恵器ミニチュア壺	ロクロナデ	底部	
311	062-01	I 10包含層	須恵器壺	ロクロナデ、ロクロケズリ	体部	
312	069-01	K 4、L 6～8包含層	須恵器壺	沈線、波状文、カキ目	口縁部小片	
313	064-01	K 6包含層	須恵器提瓶	カキ目、ロクロナデ、ロクロケズリ、沈線	体部3/4	
314	068-07	L 7包含層	須恵器杯身	ロクロナデ	1/8	
315	069-02	J 7包含層	ロクロ土師器椀	ロクロナデ	2/3	
316	062-02	K 8包含層	灰釉陶器	ロクロナデ、ロクロケズリ	底部	
317	063-01	I 27包含層	山皿	ロクロナデ、糸切り痕	完形	
318	072-03	J 4包含層	土錘	ナデ		

第5表　C地区遺物一覧表

4　まとめ

（1）C地区の掘立柱建物群の変遷

櫃垣内遺跡C地区の飛鳥～平安時代の掘立柱建物は、35棟検出した。掘立柱建物は平面形と規模により、①桁行4～5間×梁行2～3間で平面形が長方形の比較的大きな側柱建物（以下、長方形型屋という）、②4間×2間、3間×3間、あるいはそれ以下で平面形が正方形に近い比較的小さな側柱建物（以下、正方型屋という）、③2～3間×2～3間の総柱で倉庫と考えられる建物（以下、倉庫という）の三種類に分けることができる。以下、建物群の変遷を規模とセット



第31図　C地区遺構出土遺物実測図（1：4）

関係を中心に時期順に検討しておきたい。

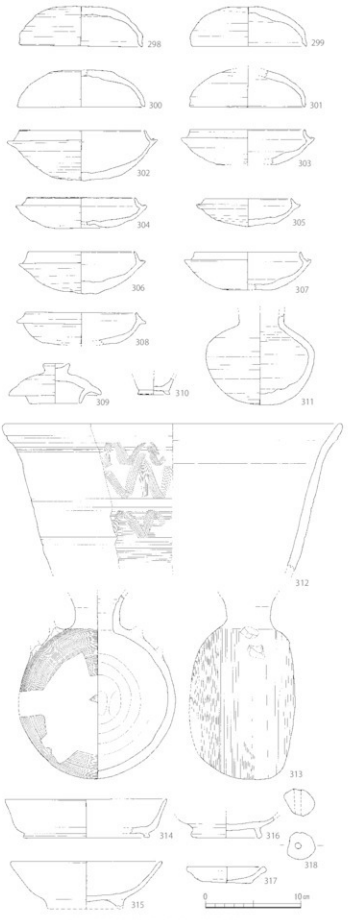
①飛鳥時代ＴＫ209型式併行期（７世紀初頭～前半）

長方形型屋はＳＢ22・27・34・37の４棟で、いずれも東西棟である。桁行は４～５間、梁行は３～４間または２間＋庇で、面積は32～51㎡である。正方形型屋はＳＢ36・38・48の３棟で、規模は３間×２間、面積は18～24㎡である。倉庫はＳＢ56の１棟で、面積は8.1㎡である。

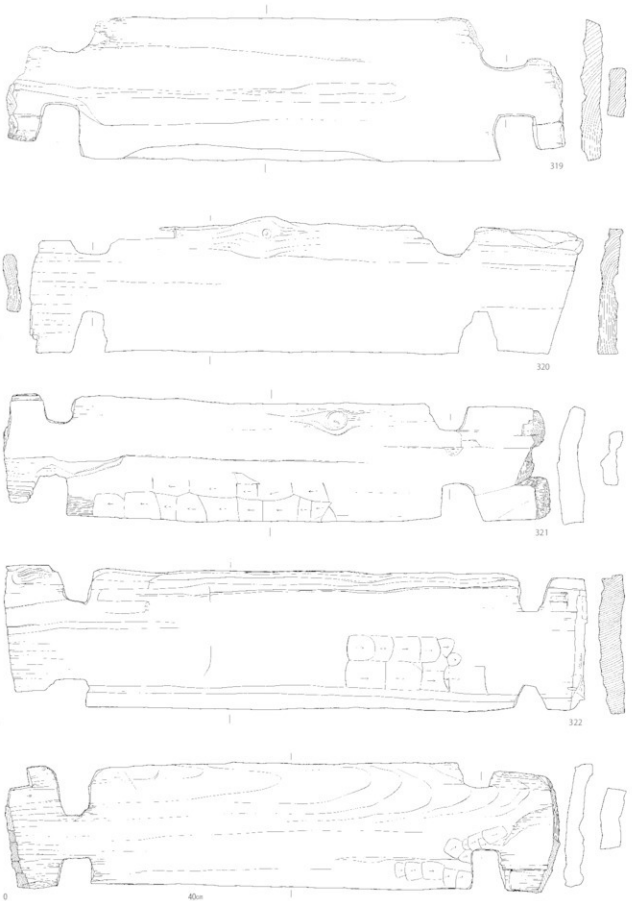
この時期の建物群は調査区の北と南に分かれる。北群はＳＢ22・34・36～38・47・48の７棟であるが、棟方向によりさらにａ～ｃ群に分けることができる。①ａ群は２棟からなり、長方形型屋のＳＢ22がＥ33°Ｓ、正方形型屋のＳＢ36がＮ37°Ｅでほぼ直交する。②ｂ群は長方形型屋のＳＢ34・37と正方形型屋のＳＢ38の３棟からなり棟方向はＥ23～25°Ｓである。ＳＢ37とＳＢ38がセット関係であるが、ＳＢ34とセットになるべき正方形型屋は調査区外にあると考えてよいであろう。③ｃ群は長方形型屋のＳＢ47と正方形型屋のＳＢ48で、棟方向はＮ25～26°Ｅである。なお、ｂ群のＳＢ34

遺物番号	実測番号	取上番号	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備　考
***		1	北６段目				破片
***		2	西６段目				破片
***		3	東６段目				破片
***		4	南５段目				破片
***		5	北５段目				
***		6	東５段目				
***		7	北４段目				破片
***		8	西５段目				
***		9	南４段目	116			
***		10	西４段目	120	23		
319	1087-01	11	東４段目	115	30	4	
320	1088-01	12	南３段目	116	25	4	
321	1089-01	13	北３段目	112	24	5	手斧痕
322	1090-01	14	西３段目	120	29	5	手斧痕
***		15	東３段目	117	18	5	
***		16	北２段目	115	21	5	手斧痕
323	1091-01	17	南２段目	115	25	5	手斧痕
***		18	東２段目	120	28		
***		19	西２段目	120	16		
***		20	北１段目	114	24	5	手斧痕
***		21	南１段目	115	29	5	
***		22	東１段目				
***		23	西１段目	119	24	5	

第６表　井戸 SE8 井戸枠横板一覧表



第 32 図　Ｃ地区遺物包含層等出土遺物実測図（1：4）



第 33 図　井戸 SE8 出土木製品実測図 (1：8)

とｃ群のＳＢ48の切り合いは不明である。

南群はＳＢ27とＳＢ56からなるが、この2棟は棟方向が異なっており、若干の時期差があると考えられる。一応ＳＢ27をｄ群、ＳＢ56をｅ群としておく。南群の建物は調査区の端に位置しており、中勢道路調査区で確認された建物との関連が考えられる。

この時期の建物は、長方形型屋と正方形型屋の2棟をセットとしている。また、1棟しか確認できなかったが、倉庫もみられる。

②飛鳥時代Ⅰ～Ⅱ（7世紀前半～中葉）

掘立柱建物は調査区の中央から南端にかけてみられる。長方形型屋はＳＢ20・21・53の3棟である。いずれも桁行4～5間の東西棟であるが、面積は25～39㎡と前の時期に比べやや小さくなる。正方形型屋は、ＳＢ31・50の2棟であり、ともに南北棟である。面積は14～15㎡ほどで、前の時期に比べやや小さくなる。倉庫はＳＢ24・25・33・54の4棟であるが、面積は12～16㎡で前の時期に比べ大きくなる。ＳＢ33の平面形は、桁行が梁行より短いという構造である。

当該期の建物は棟方向が揃っているものは少ないが、若干の幅を容認すればｆ～ｉの4群に分けることができる。①ｆ群は長方形型屋のＳＢ20・21と倉庫のＳＢ33の3棟からなり、棟方向はＥ2～10°Ｓである。②ｇ群は倉庫のＳＢ24とＳＢ54からなり、棟方向はＥ33～38°Ｓである。③ｈ群は長方形型屋のＳＢ53と倉庫のＳＢ25からなり、棟方向はＥ41～42°Ｓである。④ｉ群は2棟とも正方形型屋で、ＳＢ31がＮ34°Ｗ、ＳＢ50がＥ27°Ｎと概ね直交する。ｇ群とｈ群は、ＳＢ24とＳＢ25、ＳＢ54とＳＢ53がそれぞれ重複しているが、新旧関係は不明である。また、ｇ群とｈ群は調査南端に位置しており、中勢道路調査区の建物も含めた検討が必要である。

この時期では2～3棟を1組としたセット関係で群を構成しており、多くの場合1棟の倉庫が含まれることが特徴である。

③奈良時代

確実に奈良時代に限定できる掘立柱建物は、長方形型屋のＳＢ23・30の2棟だけである。建物の面積はＳＢ30が18㎡ほどであり、前の時期に比べてさらに小さくなる傾向にある。建物群の把握にあたっては不明な点が多い時期であるが、一応、ＳＢ23をｊ群、ＳＢ30をｋ群としておく。ＳＢ30の南約30ｍには井戸ＳＥ8があるが、セット関係であろう。ＳＢ23は調査区の南端で検出されたもので、棟方向がＮ44°Ｅである。奈良時代の建物は中勢道路調査区でも多数確認されており、その中にはＳＢ23と棟方向を揃える建物が相当数みられる。

④平安時代

平安時代の掘立柱建物はＳＢ39・45の2棟である。ＳＢ39は長方形型屋の側柱建物で面積は21㎡であり、時期は平安時代前～中期である。ＳＢ45はいわゆる総柱建物で面積は50㎡であり、平安時代後期以降である。なお、ＳＢ45の北約20ｍに位置する井戸ＳＥ9は平安時代末期～鎌倉時代初頭の遺物が出土しているが、これは埋没期を示す遺物である。したがって、掘立柱建物ＳＢ45と井戸ＳＥ9は同時期に存在していたと考えてよいであろう。平安時代の建物は中勢道路調査区でも3棟が相当の距離をおいて確認されており、各建物は単独で存在していた時期と考えられる。

（2）今後の課題

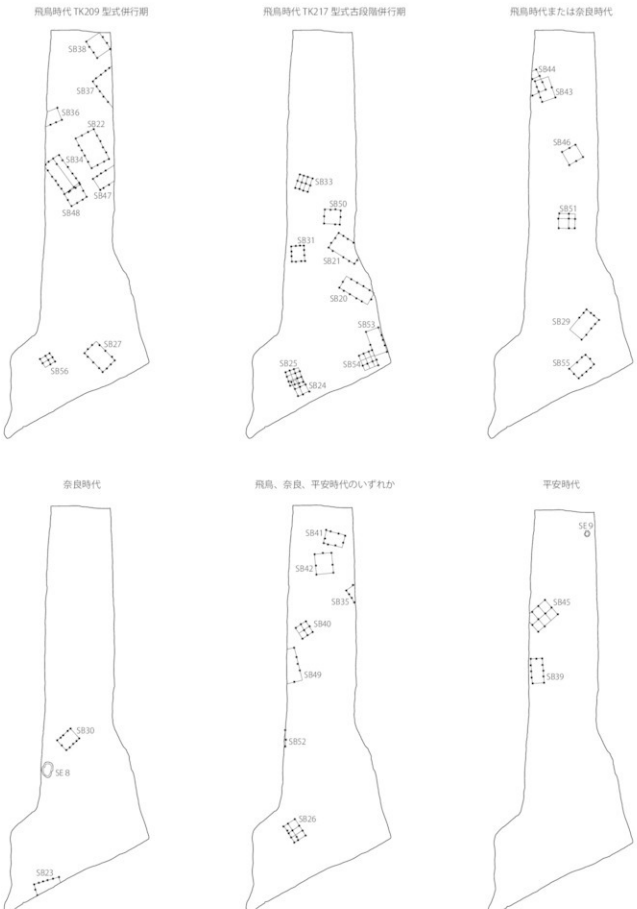
以上、Ｃ地区の掘立柱建物群を時期順に検討してきたが、いくつかの課題が残っている。

1点目は、上記の検討では時期を細分できずに飛鳥～奈良時代、飛鳥～平安時代とした掘立建物を捨象して検討を行ったことである。今後、様々な視点からの検討により、これらの建物の評価を定めることが必要と考える。

次に、中勢道路調査区で検出した建物群を含めた橋垣内遺跡全体での検討である。中勢道路調査区では、飛鳥～平安時代の掘立柱建物は133棟確認されており、Ｃ地区の35棟を合わせると合計168棟になる。各建物の時期は判断されているが、橋垣内遺跡全体を対象にして建物の棟方向や位置関係を基にそのセット関係を検討することが今後の課題である。

なお、橋垣内遺跡の周辺に所在する六大Ａ遺跡、六大Ｂ遺跡、大古曽遺跡、安養院跡などを含めた古代の集落や郡衙等の問題についてはすでに、既刊の報告書に記されているので参照されたい。

（川戸達也・河北秀実）



第 34 図　掘立柱建物変遷図

Ⅴ　県道A地区（丸垣内地区）の調査

1　層序

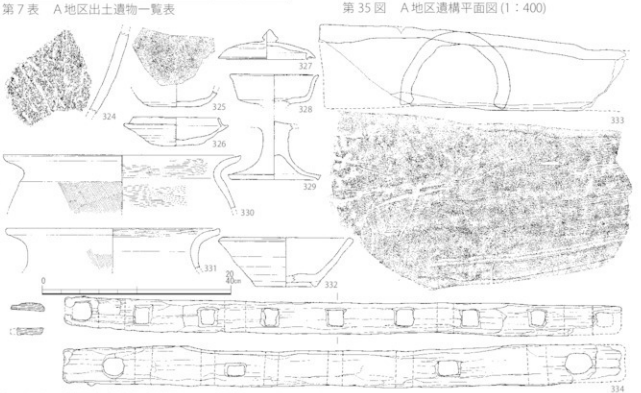
A地区は、本年度の調査範囲の北西端に位置し、平成２年度以前は標高 11 ～ 12 mの水田であった。しかし、平成２年度に行われた団体営ほ場整備の際にかなり深くまで削平を受けていた。

この地区の基本的な層序は、第１層表土、第２層褐色粘質土、第３層暗褐色～黒褐色粘土、第４層褐色～灰白色砂であり、第２層に遺物の包含が見られる。

遺物番号	実測番号	出土遺構 出土位置	器　種	技法の特徴等	残存度	備　考
324	002-02	C9河道	縄文土器 深鉢	内面ナデ 外面ケズリ	小片	
325	009-02	B3包含層	須恵器杯身	ロクロナデ ヘラ切り未調整	底部	底部内面にヘラ記号
326	009-01	B3包含層	須恵器杯身	ロクロナデ ヘラ切り未調整	2/3	
327	003-01	D5包含層	須恵器杯蓋	ロクロナデ ロクロケズリ	完形	
328	073-07	D5包含層	須恵器高杯	ロクロナデ	杯部 1/8	
329	074-04	D2包含層	須恵器高杯	ロクロナデ	脚部	
330	074-02	D3包含層	土師器甕	ヨコナデ ハケ目	口縁部 1/8	
331	074-01	D3包含層	土師器甕	ヨコナデ ハケ目	口縁部 1/5	
332	073-01	表土	山茶椀	ロクロナデ 糸切り痕 高台有	1/4	
333	006-01	SR2上層	丸瓦	凸面ナデ 側面ケズリ	狭端側 欠損	
334	1032-01	SR2	木製品 馬脚台木		ほぼ 完形	

第７表　A地区出土遺物一覧表

第 35 図　A地区遺構平面図（1：400）



第 36 図　A地区出土遺物実測図（1：4 ただし 334 は 1：8）

2　遺構

（1）旧河道

ＳＲ１　幅５～９ｍ、深さ20～30㎝程の旧河道で、北東から南西に流れていたと考えられる。ＳＲ２によって切られているが、埋土はＳＲ２上層と大きな相違が無いため、ＳＲ２の時期に近いと考えられる。

ＳＲ２　幅４～７ｍ、深さ20～110㎝の旧河道である。標高は、北西端で10.6ｍ、南東端で9.9ｍで、南東に向かって徐々に深くなっており、北西から南東に流れていたと想定できる。埋土は黒色粘質土である。上層から丸瓦、埋土から須恵器杯と馬歯が出土している。Ａ地区の北側に隣接する大垣内遺跡の第１次調査Ａ地区では、ＳＲ２の続きが長さ50ｍ程検出されており、古墳時代から奈良時代の遺物が出土している。

3　遺物

縄文土器（324）　深鉢の体部下方の小片で、外面はケズリ、内面はナデである。晩期後半のものである。

須恵器杯身（325・326）　325は底部の破片であるが、内面には ✣ 形のヘラ記号がみられる。326は口径９㎝と小型化しており、たちあがりは低く内傾し、受部は水平に近い。体部はロクロナデで、底部はヘラ切り未調整である。ロクロ回転は時計廻りである。ＴＫ217型式併行期である。

須恵器杯蓋（327）　天井部の中央につまみがつく。内面にかえりをもち、かえりは口縁端部よりも若干下方へ突出する。天井部外面はロクロケズリである。ＴＫ217型式に併行する時期のものであろう。

須恵器高杯（328・329）　328は杯部、329は脚部であるが、別個体である。328は口縁部が外反し、全体はロクロナデである。

土師器甕（330・331）　口径が23～25㎝と大きく、長胴甕になるものと思われる。口縁部は、330は外面に面をもち、331は内側に若干つまみ上げる。

山茶椀（332）　体部は直線的で、口縁端部は外面に面をもつ。藤澤編年の７型式、13世紀後半である。

丸瓦（333）　行基式丸瓦で、凹面は側面側を面取りし、一部に工具痕跡が残る。凸面はナデにより叩き痕を完全に消しているが、一部に布目痕がみられる。側面はヘラケズリである。広端面はヘラケズリで調整するが、蕨痕跡が残っている。色調は灰色で、焼成は堅く、胎土には砂粒を含む。

馬鍬台木（334）　長さ119㎝、一辺８×６㎝である。歯孔は一辺４㎝で、９個がほぼ等間隔に上下面に貫通する。引棒孔は径４～６㎝の円形で、両端から１孔目と２孔目の歯孔間の側面に貫通させる。柄孔は４㎝×３㎝の長方形で、両端から３孔目と４孔目の歯孔間の側面に貫通させる。

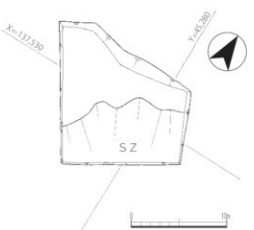
（川戸達也・河北秀実）

Ⅵ　拡張区の調査

拡張区はＣ地区のすぐ北側で、Ⅲ－２トレンチを拡張したもので、東西12ｍ、南北８～14ｍである。基本的層序は、第１層が表土、第２層が淡褐色細砂の地山である。

ＳＺ　調査区南半の落ち込みである。埋土は、第１層が黄褐色砂礫土に粘土が混入、第２層が灰色または暗灰色粗砂と黒色粘質土の互層、第３層が灰白色砂礫である。

（川戸達也・河北秀実）



第37図　拡張区平面図（1：400）

Ⅶ　採集遺物

調査区周辺での採集遺物で、以下に軒平瓦三点を紹介しておく。

軒平瓦（335）　瓦当文様は二重弧文で、瓦当部左半部が残存する。顎は段顎で、顎長は 12㎝ある。凹面には布目痕、凸面には縄叩き痕が残る。凹面に粘土板合わせ目痕がみられるが、重ね方はSである。色調は暗灰色で、焼成は堅く、胎土には砂粒を含む。

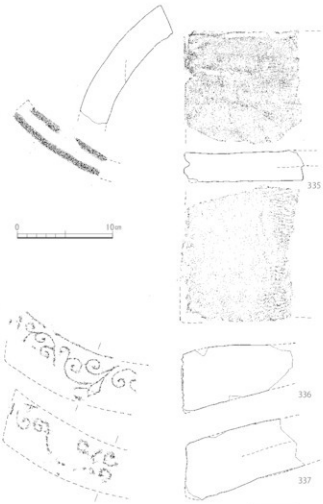
軒平瓦（336）　瓦当文様は均整唐草文で、瓦当部左半部が残存する。内区の文様は通常の均整唐草文を上下逆転させている。中心飾りはC字下向である。唐草文は中心飾りの上部から伸びる。第１支葉は上方向に反転し、第２支葉は下方向に伸びるが先端は欠損のため不明である。第３支葉は上方向に伸び、途中で分岐し、それぞれが反転する。第４支葉は下方向に伸びるが、第２支葉と合体して、あたかも中空の蕾状となるが、その先端は欠損のため不明である。茎は第４支葉を派生させたその先は、欠損しているが、先端部は支葉が、下方、下方、上方、下方の順に反転し、終息する。内区は界線で囲まれており、外区は、脇区のみが存在し、上外区と下外区はない。脇区は幅１㎝であるが、残存度が悪く文様構成は不明である。顎は曲線顎になるものと思われる。色調は暗灰色で、焼成は堅く、胎土には砂粒を含む。

軒平瓦（337）　瓦当文様は唐草文で、瓦当部左半部が残存する。反転する支様が、何カ所かみられる。文様の彫りは浅く、また文様部の剥離が激しいため、全体の文様構成は不明である。最初に文様部分の粘土を笵に埋め込み、その後、瓦当全体の粘土を押し当てている。色調は灰色で、焼成は堅く、胎土には砂粒を含む。

（河北秀実）

遺物番号	実測番号	出土遺構 出土位置	器　種	技法の特徴等	残存度	備考
335	003-02	表面採集	二重弧文軒平瓦	凹面布目 凸面縄叩き痕・ナデ	瓦当部左半分	
336	005-01	表面採集	均整唐草文軒平瓦	凹面ケズリ 凸面縄叩き痕・ナデ	瓦当部左半分	
337	065-01	表面採集	均整唐草文軒平瓦	凹面ケズリ 凸面ナデ	瓦当部左半分	

第８表　採集遺物一覧表



第 38 図　採集遺物実測図（1：4）

〔註〕

（1）周辺の遺跡については、下記の文献を参考にした。
　a．津市教育委員会『上津部田城址発掘調査報告』1989
　b．津市教育委員会『上津部田城址（第2次）発掘調査報告』 1992
　c．津市教育委員会『三重県津市遺跡地図』1988
　d．三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勝道路埋蔵文化財発掘調査概報 Ⅲ』 1991
（2）三重県埋蔵文化財センター「東浦遺跡ほか」『東浦遺跡・椋本南方遺跡ほか』1993
（3）安濃町遺跡調査会『平田古墳群』1987
（4）三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『大里地区遺跡群』『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告　第1分冊 』1992
（5）〔註〕（1）cに同じ
（6）三重県埋蔵文化財センター「宮ノ前遺跡」『一般国道23号中勝道路（9工区）建設事業に伴う大古曽遺跡・山鹿遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』 1995
（7）三重県埋蔵文化財センター「松ノ木遺跡」『一般国道23号中勝道路（9工区）建設事業に伴う松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』 1993
（8）三重県教育委員会「納所遺跡―遺構と遺物―」1980
（9）三重県教育委員会「辻の内遺跡―付―北端遺跡」『昭和50年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告 Ⅰ』 1976
（10）三重県教育委員会『多倉田遺発掘調査報告』1981
（11）a．津市教育委員会『長遺跡発掘調査報告』1989
　b．三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勝道路（9工区）建設事業に伴う長遺跡発掘調査報告』2000
　c．津市教育委員会『長遺跡発掘調査報告』2005
（12）三重県埋蔵文化財センター「山鹿遺跡」『一般国道23号中勝道路（9工区）建設事業に伴う大古曽遺跡・山鹿遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』1995
（13）三重県教育委員会「森山東遺跡」『一般国道23号中勝道路（9工区）建設事業に伴う松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』1993
（14）津市教育委員会『中虎遺跡発掘調査報告』1977
（15）a．三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勝道路（8工区）建設事業に伴う六大A遺跡発掘調査報告（木製品編）』2000
　b．三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勝道路（8工区）建設事業に伴う六大A遺跡発掘調査報告』2002
　c．三重県埋蔵文化財センター『六大A遺跡発掘調査報告―資料分析・遺物観察表・写真図版編―』2003
（16）津市教育委員会『墓の谷1号墳発掘調査報告』1976
（17）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勝道路（9工区）建設事業に伴う西岡古墳発掘調査報告』1995
（18）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報12』1978
（19）京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄（本文編）』臨川書店
（20）津市教育委員会『安養院跡発掘調査報告』1990
（21）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勝道路（9工区）建設事業に伴う六大B遺跡（B～Ⅰ地区）』発掘調査報告』2006
（22）三重県埋蔵文化財センター「大古曽遺跡」『一般国道23号中勝道路（9工区）建設事業に伴う大古曽遺跡・山鹿遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』1995
（23）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勝道路（9工区）建設事業に伴う橋垣内遺跡発掘調査報告』1997
（24）三重県埋蔵文化財センター『津市大里窪田町大垣内遺跡』1993（現地説明会資料）
（25）続群書類従完成会『続群書類従第1輯』所収
　（1987年訂正三版）
（26）a．三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報 9
　昭和53年度』 1979
　b．三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報 14
　昭和58年度』 1984
　c．三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報 15
　昭和59年度』 1985
　d．津市教育委員会『川北遺跡、川北城跡発掘調査報告』 2005
（27）三重県埋蔵文化財センター『峯治城跡』1990
（28）a．〔註〕（1）aに同じ
　b．〔註〕（1）bに同じ
　c．津市教育委員会『上津部田城址（第3次）発掘調査報告』1992
（29）三重県教育委員会『大和街道伊勢別街道伊賀街道一歴史の道調査報告書―』1983
（30）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勝道路（9工区）建設事業に伴う六大B遺跡（A地区）発掘調査報告』1999
（31）樋上昇「儀軌の系譜」『考古学研究　52―4』 2006
（32）〔註〕（31）に同じ
（33）〔註〕（15）aに同じ
（34）〔註〕（23）に同じ
（35）田辺昭三『陶邑古窯址群 Ⅰ』平安学園考古クラブ　1966
（36）宇野隆夫『井戸考』『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』(有)真陽社
（37）山茶椀の編年については、主として下記の文献を参考にした
　a．藤澤良祐「瀬戸古窯址群 Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 Ⅰ』 瀬戸市歴史民俗資料館　1982
　b．藤澤良祐「穴田南窯址群発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 Ⅱ』 瀬戸市歴史民俗資料館　1983
　c．藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター　1994
（38）a．中野晴久「赤羽・中野 生産地における編年について」『全国シンポジウム 中世常滑焼を追って 資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所　1994
　b．中野晴久「常滑・渥美」『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』 2005
（39）a．横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として―」『九州歴史資料館研究論集 4』 1987
　b．森田勉「鎌倉出土の中国陶磁器に関して」『貿易陶磁研究 No.1』 日本貿易陶磁研究会　1981
（40）灰釉陶器の編年については、主として下記の文献を参考にした
　a．楢崎彰一ほか『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（Ⅰ）』 愛知県教育委員会　1980
　b．藤澤良祐「瀬戸古窯址群 Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 Ⅰ』 瀬戸市歴史民俗資料館　1982
　c．斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」『月刊考古学ジャーナル　No.211』 ニュー・サイエンス社　1982
　d．楢崎彰一ほか『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』 愛知県教育委員会　1983

B地区全景（北から）

B地区 SR2遺物出土状況

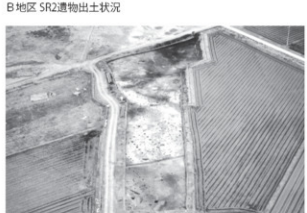
B地区 SR2遺物出土状況（西から）

B地区 SR2遺物出土状況

B地区 SR2遺物出土状況

B地区 SR2遺物出土状況

B地区 SR2（東から）



C地区（北上空から）

遺構写真 1

C地区全景（東上空から）

C地区全景（北から）

C地区 SB22（南から）

C地区 SB20（西から）

C地区 SB21（西から）

C地区 SB31（南から）

C地区 SB30（北から）

C地区 SE8（東から）

C 地区 SE8（南から）

C 地区 SE8（北から）

C 地区 SE9

A 地区全景（南から）

164

165

166

167

170

171

168

169

172

172

173

173

遺構写真 3 および出土木製品 1

174

175

176

178

181

182

177

179

180

181

183

184

185

187

188

188

186

192

190

191

195

195

193

194

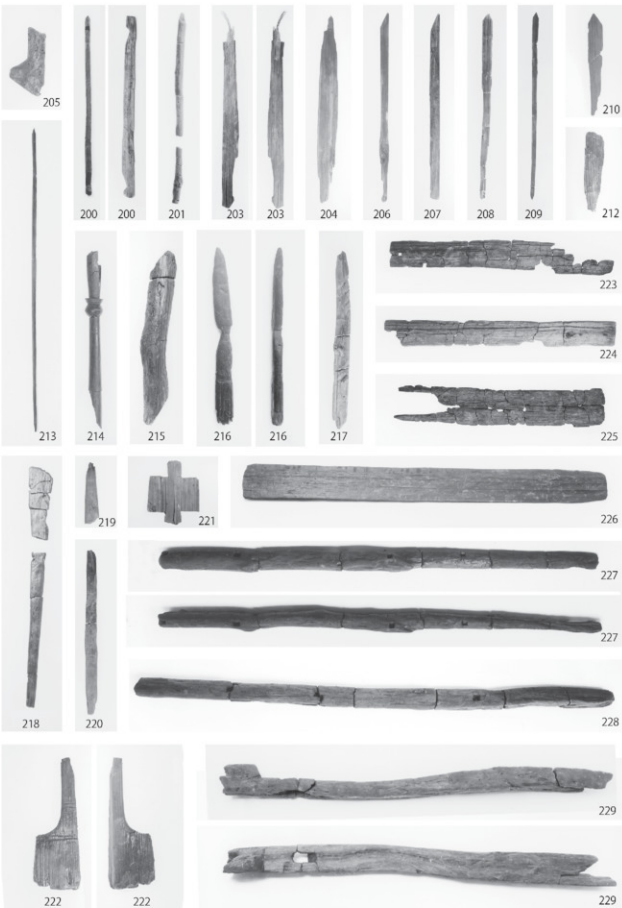
196

197

198

199

出土木製品 2


205
200
200
201
203
203
204
206
207
208
209
210
212
213
214
215
216
216
217
223
224
225
218
219
220
221
226
227
227
228
222
222
229
229

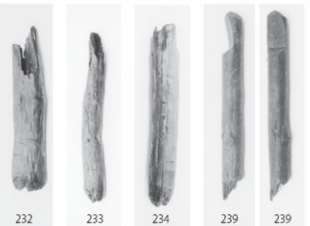
出土木製品 3

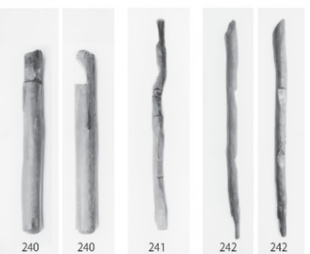
230

230

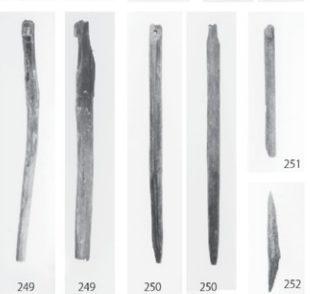
231

235 236 237 238


232 233 234 239 239

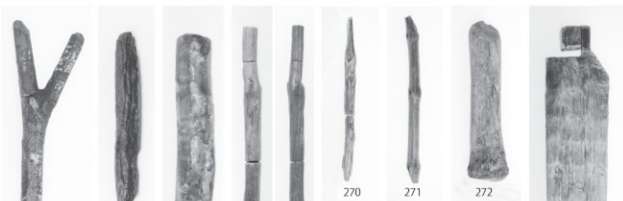

240 240 241 242 242

243 244 245 246 247 248


249 249 250 250 251 252

出土木製品 4

253
254
255
256
257
258
261
260
262
263
264
265
265


266
267
268
269
269
270
271
272
273

274
275
276
277
278
279
280
281

282
283
334
334

出土木製品 5

報 告 書 抄 録

ふりがな	はしがいといせき（けんどうえーからしーちく）はっくつちょうさほうこく
書名	橋垣内遺跡（県道Ａ～Ｃ地区）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	研究紀要
シリーズ番号	18－３
編著者名	川戸達也・紀平みどり・穂積裕昌・河北秀実
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596-52-1732
発行年月日	西暦 2009年３月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
橋垣内遺跡（はしがいといせき）	三重県津市（みえけんつし） 大里窪田町字（おおさとくぼたちょうあざ） 橋垣内（はしがいと）・桜垣内（さくらがいと）・丸垣内（まるがいと）	201	a810	34° 45′ 29″	136° 29′ 47″	19920817～ 19930129	4,000㎡	平成４年度 主要地方道津関線道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
橋垣内遺跡	集落跡	縄文時代	河道	縄文土器	儀杖形木製品
		弥生～古墳時代	河道	弥生土器・土師器 須恵器・勾玉・臼玉・木製品	
		飛鳥時代	掘立柱建物・溝・土坑	土師器・須恵器	
		奈良時代	掘立柱建物・井戸・溝	土師器・須恵器	
		平安時代	掘立柱建物・井戸	陶器・青磁・白磁	

要約	弥生～古墳時代の河道では古墳時代中期の大量の木製品が出土し、当地域の基本的な木器組成を示す遺跡となった。 飛鳥～奈良時代を中心とする掘立柱建物を検出し、当該期の周辺の遺跡も含めた集落の様子が判明した。

橋垣内遺跡（県道Ａ～Ｃ地区）発掘調査報告

研究紀要第18－３号

2009（平成21）年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　光出版印刷株式会社